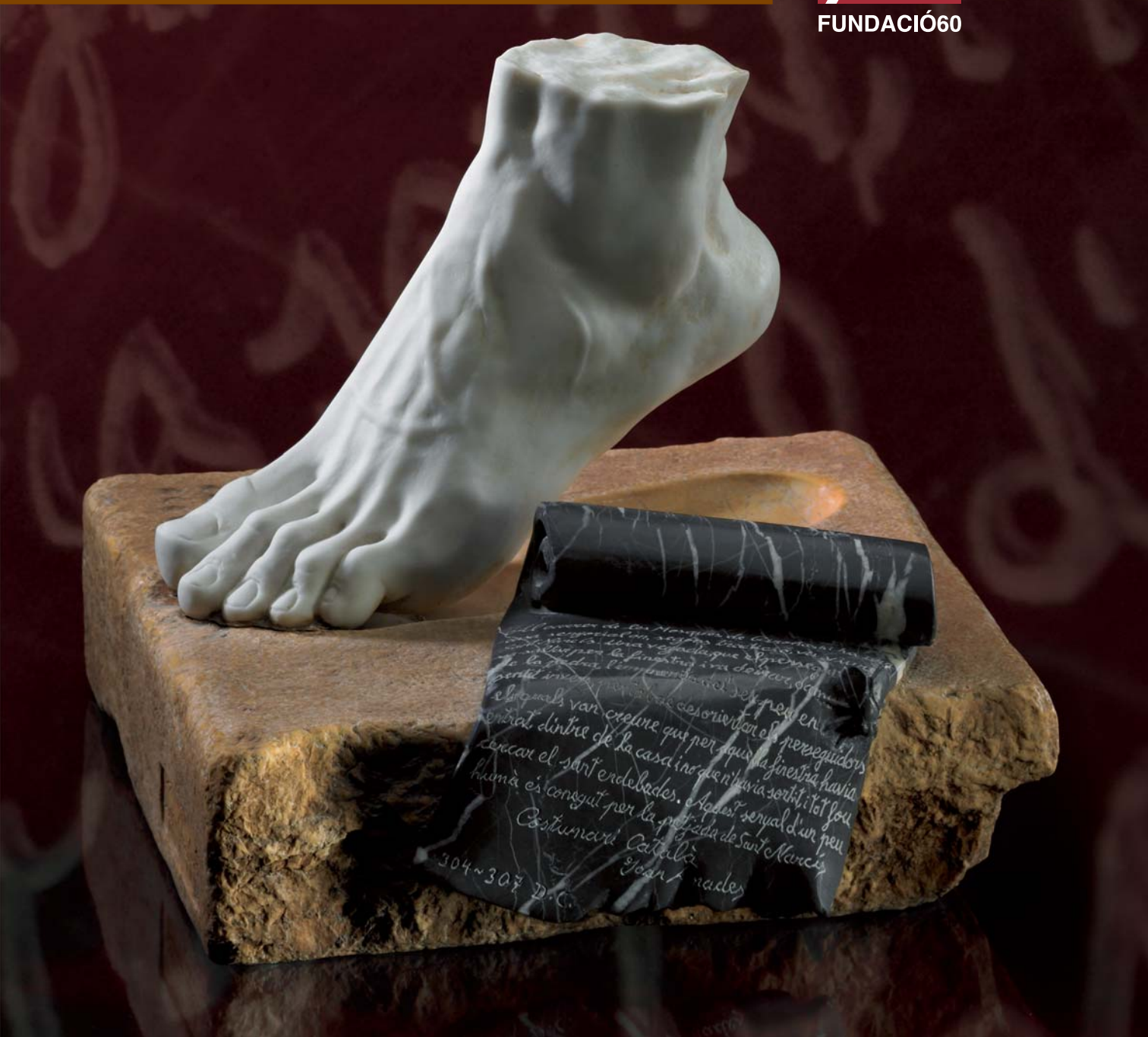
42の不思議な物語
“ジロナの伝説”

FUNDACIÓ60



我々はこの本を‘Fundació 60’代表で
この文化事業企画の起草者である
ロセル・バリュマジョ・トライテル
(Roser Vallmajó i Trayter) に捧げる。
彼女は2007年2月28日
51歳で永眠した。

ここにあなたの不思議な
ジロナへの訪問が始まる

42 の不思議な物語

“ジロナの伝説”

アインシュタイン曰く、
もしあなたの子供達が
知性豊かに育つように願うなら、
彼らに物語を読みなさい。
そしてもっと賢くなる様に願うなら、
もっと物語を読んであげなさい。
毎日子供達に物語を読み聞かせなさい、
伝説、物語、そして妖精の話を…

Gerard Roca i Ayats, （ジェラード・ロカ・アヤーツ）サン・グレゴリ（Sant Gregori, Girona）出身、1972年12月9日生まれ（34歳）。彼は画家・彫刻家であり、この本に登場する四十二のジロナの伝説の挿画、大理石彫刻の作者。それらはホテル「Llegendes de Girona」のテーマとなるだろう。アングレス市(Anglés) 在住。
gerard.roca.ayats@hotmail.com

Nuri Ros i Rue, （ヌリ・ロス・ルエ）パラフルジェリ（Palafrugell, Girona）出身、1975年12月31日生まれ（31歳）。彼女は社会・文化面における報道記者・人類学者で、バルセロナ自治大学（Universitat Autónoma Barcelona）に在籍。彼女は報道の仕事と社会活動を両立し、現在'Fundació Jaume Bofill'のカタロニア社会不平等問題の委員会で働いている。この本に登場する四十二のジロナの伝説の著者。ジロナ市在住
(rrnurry@hotmail.com)

この本に登場する四十二のジロナの伝説の、文章及び大理石彫刻の版権・所有権は全て、'Fundació 60'（財団法人60 / フンダシオ・シシャンタ）に帰属する。
それらはジロナ市民と訪問者達に一般公開されている。

この本は2007年4月23日セント・ジョルディの日に、カタロニア語・スペイン語・英語・フランス語・ドイツ語で出版された。

2008年にその拡大版を、さらなるジロナの伝説と大理石彫刻、更に魅惑的で不思議な伝説的ミステリーを加え計画中。それはイタリア語・ロシア語・オランダ語・アラビア語・中国語・日本語も加わり、全11ヶ国語にて編集予定。

(e-mail: info@fundacio60.org / www.fundacio60.org).

編集にあたって

ホテルの主題又は付加価値

流動的な新しい文化―中でも'文化的観光'と呼ばれるもの―旅における'滞在する場所'は、常にその価値を益々高めている。
伝説の世界は確実に我々の考え方や理念の一部を形成している。

だから伝説と滞在とを融合する事は、我々が日々探し求めている付加価値として的を得ている。

我々の国は伝統とルーツ、慣習と継続、職人仕事とアイデンティティ、工芸と歴史に基づく国である事に疑いの余地はない。

しかしまた遥かに遡る歴史を持ち、独自の古代神話の中へそのルーツを探し求める伝説的な伝統の国でもある。カタロニアの慣習とその伝説の奥深さは、この伝統の継承の中でも特に豊かなものだ。年代記の中に偉大な名前（Joan Amades, Aurelí i Maria Aurèlia Capmany）と共に、アイデンティティの回復の為に推進され、調査され、広められた時代の幅広い充実した記録が残っている。

我々の伝説の豊かさはその全域に色濃く見られるが、言うまでもなく特にジロナ市内にその本質は凝縮されている、歴史あるその街の心臓部に。今回の伝説集に選ばれた多くの伝説の中には、宗教的な、それに対し冒涜的な、厚い崇拝、歴史、庶民のルーツ…を主題としたものが見られる。

それら全てがこの輝かしいホテルの冒険にあたり、充分な多様性と魅力的・暗示的要素を備えている。

ホテルの設立に選ばれたこの建物は、間違いなく幻想と伝統の間の世界において重要な意味を持っている。聖ナルシスの姿が記録された場所の近く、ジロナの伝説における軸となる場所の一つに位置している。

この伝説集の中で二つの物語は、この場所とその周囲にいくつか仮説の起源がある様だ。この建物は近年までは賃貸住宅で様々な家庭を内包していた。その内部は大きく変更されたものの、いくつかの興味深い要素が今日復元可能となった。
もう一つこの建物について特筆すべき点は、建物正面の力強いいくつかのこだわりの要素、特にポルタル・デ・ラ・バルサ通り(C/Portal de la Barca) に面した、その建物の気品と質感を高める為に改築された大きな窓とバルコニーだ。

現在我々の仕事は、過去とその地区の歴史に光を差し込む為に、この建物の更なる特性を見いだしていく事だろう。

伝説の世界を主題とした考え方は、その内部を定義するだけでなく、全体を通して大変意味深い物語の糸口を紹介していく事。

この仕事の基本的提案は、伝説世界を取り込む事によって、建物をただ修復するのではなく他とは異なる特色を出していく事だ。

この新しい考え方は、そのホテルの特性を庶民の賢明な知識の中に見いだす試みだ。

旧市街の幅広い充実した記録情報が入手可能であり、誰もがローマ時代末期に築かれた市を囲む壁からそれをなぞっていく事が出来る。この不規則で曖昧な三角形とその周囲は、ジロネリャ城の建設とガリガンス川沿いの壁の拡張工事が行われた9世紀後半まで変わる事はなかった。

その後11世紀に市を囲む壁の内側で（大聖堂、聖ペレ、聖ニコラウ、聖ダニエル、聖マルティ、聖エウラリア、聖スサンナの）大規模な建設工事が実施された。また市の壁外側の聖フェリウ地区周辺の建設もその頃に始まったと考えられている。

しかし14世紀から15世紀にかけて急成長し強固な街となる時代まで、まだその平地部分まで建物は到達していなかった。中世の時代に新たな市を囲む壁（murallas）が建設され、さらに広い地域を囲んだ。この頃にメルカダル地区を囲む壁も計画されていたが、それは15世紀の終わりまで実現しなかった。

そしてこの内側の地域に数多くの石造りの歴史的な建物やモニュメントが残り、それらは多くの訪問者を魅了し、街は観光テーマパークではなく人々の生活の中心の場でありつづける為に苦戦している。

1960年代終盤までジロナ旧市街の歴史的中心部は、真にその生活に焦点をおいた活気あふれる街であった事に疑いない。ジョアキム・ナダル（Joaquim Nadal）が何度も巧みに述べている様に、街はその後根本的な変革と復興の過程を経験しなければならなかった。1970年に'Gran Girona'（偉大なジロナ）として知ら

れる政府の野心的計画によって引き起こされた無秩序な成長も含め、過度な無制御の結果として街は活力を失った。

旧市街にとって必要不可欠な'再生'を可能にしたこの特別な計画の中で、有効な鍵となったのは我々に記念碑的状況をもたらした事、そして街はより文化的に―より観光的でさえある―活気のある地域へ、さらにその市民が共生する街になっていかなければならなかった。

これが民主主義ジロナの選択だった。そして多くの困難を乗り越えて長い道程を経て、ようやく光が差込んだ。それはある意味このホテル設立の選択にも状況は共通している。

ホテルはジロナ旧市街の中でも伝統色の濃いポウ・ロド地区にある。そこは都市生活の発信源となりつつあるだけでなく、真の意味で歴史と融合した新たな磁力を持って活性化している地区だ。交通の便も良く訪問者を受けいれる玄関口にふさわしい価値がある。伝説世界から生じる幻想がその歓迎の接待役となる、それ以上の事があるだろうか？そこは感覚的世界への旅の出発点だ。

街は石と空間又は地域とモニュメント、それ以上のものがもっと沢山ある。街は市民生活の足跡を堆積し、幾千もの希望や努力全ての歴史を刻んだ生活体験が染みこんでいる。そして想像の出来事と伝統の蓄積でもあり、それらは時の経過の中あらゆる手段で我々に継承された。中でも伝説という形式はその初期から全ての文化の中に存在した。

我々のジロナ県、特にその歴史的中心部はその分野において別格の富が堆積している。我々はそれを理解してたどり、この庶民の理念に根づいた寓話的で不可思議な世界を生きる心構えだ。それは将来的に大変魅力的な世界へ可能性の扉を開いていくように思う。

ホテルでのくつろいだ滞在は我々の日常生活の確かな断絶、我々のめまぐるしい人生の中で自分に与えるささやかなご褒美の様なもの、又は我々が必要とするつかの間の幸福。これらのコンセプトは、物質面よりも精神面に近いこの考え方から決して遠くはない。

歴史をもつ街には、様々なとらえ方、様々な歩き方、どこからでも近づける様々な角度がある。

旅行ガイドの本に添ってその豊かなモニュメントを訪ねて、その沢山の質が高く興味深いイコンを訪問する事も出来るだろうし、ローマ地区からメルカダルの壁までその脅威の歴史をたどる事も可能だ。又はその地元独特の名所を巡るツアーを選んでも良いだろうし、買物、食事、文化、新しい都市部や建築の特色を楽しむのもいいだろう。

そして伝説も、その地域をより理解し、より深く入り込む為の一手段を形成しうる。他とは異なる有意義な手段だ。

Josep Riera i Micaló（ジョセップ・リエラ・ミカロ）
カタロニア建築大学　ジロナ校　校長

ジロナ: 小さくて静かで
モダンで親しみやすい街

ジロナはその隅々から歴史が溢れだす美しい情景の街。それは地元市民にとって身近で、過去も現代社会に与えられた新らたな機会をも逃さない全ての人の為にある。

小さくて静かでモダンで親しみやすい街、ただ散策するだけであらゆる関心を満たしてくれる場所、その優れた建築遺産と二千年以上の歴史、数多くの様々な伝説と共に。伝説とは幻想的で想像力豊かで遊び心のある観点から歴史を語る、実体がなく多様性のある物語。これらの文化遺産は時間の経過と共に、旧市街の観光資源として確固たる存在となり、街全体を拡張した。

我々は伝説を通してジロナを楽しむことに、あなたを招待したい。ジロナの伝説は沢山ある。大聖堂の魔女、雌ライオンのお尻、聖ナルシスの蝿、ココリョナ—それらは特に代表的なもので、我々の街の歴史とアイデンティティ（独自性）を象徴する文化遺産だ。

我々はホテル「Llegendes de Girona」（ジロナの伝説）を心から祝福する。我々庶民の伝統や年代記録を見返し、独創的で際立ったこの企画を街の観光サービスに加えた賢明な彼等を。

Anna Pagans Gruartmoner
(アンナ・パガンス・グルァトモネール)
ジロナ市　市長

ジロナ市の歴史は
伝説の中に反映されている

伝説とは口述と記述により伝えられた、多かれ少なかれ歴史的な形で場所と人物とを限定した、想像的・幻想的要素を兼ね備えた物語。それらは現実的な事柄と関わりながら、歴史的事実と幻想的又は虚偽の要素が混同している、しかし実際起こりうる出来事。

それぞれの人類の集団は最も重要だと考えられる出来事を、記憶して語り継ぐ為に伝説の肉体を創造した。そこに客観性はなく、各々の主観的な視点で創られている。その集団はそれ自身を善良で、誠実で、勇敢であると定義し、異教徒である他者からの幾多におよぶ攻撃も、それに対する英雄的勝利となって現れる。このような感性で伝説は我々に、一つのコミュニティの歴史的過去について、特にこのコミュニティが過去をどの様に生き、それをどう解釈してきたかの情報を我々に提供する。

ジロナ市の歴史は伝説の中に反映されている。誰もが戦略を企てる地理的条件と、様々な文化の入り込む玄関口にある為に、ジロナの激動の過去はうまれた。穀物の凶作年、飢饉、伝染病、他国との攻防戦、街の聖人に対する人々の厚い信仰…これらの要素全てが、ジロナの伝説にそれぞれ刻印されている。

伝説を語るという行為はそれ自体が儀式的で、聞き手と英雄的な過去の勝利を共有すると共に、そのグループの属性に同化させる意図がある。そのグループに属する意識を与えるだけでなく、伝説はそのコミュニティの性質を強く印象づけ、その価値を広め、信仰や規則を、その規律からはずれる者達に与えられる刑罰同様に伝えている。

伝説は美しい団結と社会的機能の他に、未知なる脅威的な、又は説明のつかない現象の起源ー湧水、湖、橋、奇妙な音…を説明し理由づける手段としても、各時代の知識の部分部分を組み合わせる為に使われてきた。

伝説は生きている、それらは不動のものではなく伝わっていく過程で進化する。新しい時代に、又はそれぞれの語り手の想像に応じていく。この様な理由から同一の伝説に様々な別バージョンがある。そのいくつかはそのグループの文化的性質に適応した形で、他の文化から採り入れられている。元来伝説は庶民の創作の結果語り継がれたものだが、有名になった博学者たちの伝説もまた存在する。

科学的知識に基づく社会、そして情報における最先端技術は、伝説を生みだす過程を止めたのではなく、伝説は新しい状況に適応したのだ。そして今日ではインターネットを通して伝説は広められている。都市部の伝説は、有名人について、高級ブランドについて、そして恐ろしい出来事についても物語っている。しばしばそれらの基本的な主題は古い伝説と何も変わらない、もっとも現代的で今日の状況に適応してはいるけれども。

Nuri Ros Rue　（ヌリ・ロス・ルエ）
報道記者・人類学者

目次

伝説ナンバー		頁
	編集にあたって	6
	ジロナ市長の意見	9
	はじめに	10
	目次	11
1.	バニョレス湖	12
2.	ジロナの創設者ジェリオ	14
3.	アフラの改宗*	16
4.	聖ナルシスの召使*	18
5.	聖ナルシスの足跡*	20
6.	カタコンベ*	22
7.	カルレマニィ	24
8.	毛深いギフレ	26
9.	寺の下の竜	28
10.	聖マウリシとカルダスの邪悪な老婆	30
11.	カルカッソンのエルメセンダ	32
12.	エストパの頭のファルコン	34
13.	雌ライオンのお尻	36
14.	オオカミ通り	38
15.	ガリガンスのセイレーン	40
16.	城の息子	42
17.	ジロナのユダヤ人	44
18.	聖ナルシスの蝿*	46
19.	カスティリョの牛の呻き声	48
20.	リンゴ*	50
21.	聖フェリウと教会学校の泥棒*	52

伝説ナンバー		頁
22.	タルラ	54
23.	大聖堂の魔女	56
24.	悪魔の橋	58
25.	ランブラの吸血鬼	60
26.	黄金の雄牛	62
27.	聖アントニィの豚	64
28.	聖フェリウの生涯と奇跡*	66
29.	鐘'ベネタ'	68
30.	聖ナルシスとフランスの毒殺魔*	70
31.	ペリコットの泉	72
32.	奇跡の綿*	74
33.	ランプの油*	76
34.	シルス湖	78
35.	リェルスの魔女達	80
36.	灯火について*	82
37.	奇跡の石*	84
38.	ビエル家の花嫁	86
39.	聖カタリナの象徴主義	88
40.	恋人達の泉	90
41.	メルカダルのパン職人*	92
42.	ココリョナ	94
	企画への意見	96
	Fundació60	112
	ジロナ市の地図	116
	ジロナ県の地図	118
	参考文献一覧	120

(*) 14 の聖ナルシスに関連した伝説
20 のジロナ市内とその周辺の伝説
8 つのジロナ県内の伝説

1 バニョレス湖

バニョレス湖は不規則な八の字形で、長さは南北に2080m、幅は東西に730m。最深水位は約60mあり、リェルカ川（Llierca）の地下水とボロの湧水（Borró）を水源としている。湖が形成されたのは今から約25万年前のクアテルナリア時代。湖は水辺で起こる全ての出来事を長い長い年月見つづけてきた。子供を食べる竜、水の妖精ゴジェス（goges）、そして近年ではオリンピックゲームまでも…

25万年前　バニョレス（ジロナ）

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

これはバニョレス湖の誕生を目の当たりにしたモルガット（Morgat）という名の農夫の伝説。今から数千年前、現ポルケレス（Porqueres）の聖マリア教会（l'esglèsia de Santa Maria）のある場所からバニョレス(Banyoles) の町まで、一面に麦畑が広がっていた。その日モルガットはいつもの様に彼の牛と一緒に畑を耕していた。しばらくするとどこからか声が聞こえた。「モルガット、モルガット、耕具と牛を連れて逃げなさい」農夫はその場に立ちすくんだ。なんて不思議な事だ、とてもはっきりとしたこの声は…一体どこから聞こえるんだ？ただの空耳だろうか？彼は左右を見回して誰もいない事を確認すると、朝食を食べてずい分時間が経ったから、空腹が悪さをしているのだろうと考えて再び仕事を始めた。しかし牛が二歩と踏み出す間もなく再び声は言い張る。「モルガット、モルガット、牛を連れて家へ帰りなさい」哀れなモルガットは何が何やら訳がわからなかった。牛がしゃべってないのならこの声は一体どこから来るのだ。仕事を終えたらすぐ家へ向かおう、と考えながら再び働き始めた。しかし又声は聞こえる、今度はさらにはっきりとした大声で。「モルガット、モルガット、今すぐ家へ帰らないと後悔するぞ！」この時ばかりはモルガットも声のいう事を聞き、牛を連れて全速力で家へ向かった。彼が家へ着いた瞬間、まるで地面が張り裂ける様な爆音が背後から聞こえた。モルガットは振りかえると、荒れ狂う大波が大地から吹き上がり、木々や畑を飲みこんで溢れかえる様を目撃した。その洪水がおさまった時、それが今日リオ地方（Lió）からエストゥネス(Estunes)、聖マリア教会からバニョレスの町まで伸びる、バニョレス湖の誕生となった。

その時からバニョレス湖とその神秘的な周囲は、バニョレスの竜やゴジェスの様な幻想的な生物を授かった。ゴジェスとは、サント・パトラリ山脈（Sant Patllari）の麓、エストゥネスに住む水の妖精ニンフ（nymphs）のこと。この妖精たちは、昼間は地底の金や宝石をちりばめた壁の内側で、蜘蛛の巣のような絹糸の網に守られて暮らしているが、真夜中になると月明かりを消しに外へ出てきて、美しい絹のベールを洗ったり湖面に映る自分の姿を眺めたりしている。あなたは彼女達をまだ見たことがないですか？

2 ジロナの創設者ジェリオ

地中海全域から一握りの神話的英雄達が、ジロナの地に都市を築くためにやってきた。その経緯はホメロスのオデッセイにも記述があり、この地でいくつかの戦いが巻き起こる。トゥバル（Túbal）、ジェリオ（Gerió）、ヘラクレス（Heracles-Hércules）、そしてピレネー（Pirene）がジロナの地で染めあげる神話と化した壮大な物語。

紀元前2220年　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

クリサオール（Crisaor）とコリロエ（Col·lírroe） の息子、ジェリオは巨大な三つ頭の怪物だったと言われている。彼は地中海における旅のひとつで、彼が築いたコトリゥレ（Cotlliure）の町があるカタロニア北部より我々の地へたどり着いた。ライエタン（laietans） にある小さな山の頂上からオンニャー（Onyar） と呼ばれる川の右岸までを境にジェリオは新たに街を築き、そこをなんとジェリオナ！（Geriona） と命名した。しかしジェリオが占領した地は決して主のいない土地ではなく、イベリア（Ibéria）の王トゥバルの王国領土だった。ジェリオはトゥバルと流血の戦をして王を殺し、その土地を自分のものにした。トゥバルの娘、美しいピレネーは北部の山へ逃亡した。しかしジェリオはトゥバルがいなくなっただけでは満足せず、いつの日かイベリアの地に父の正当な後継者としてピレネーが舞い戻り、王座を奪われる事を恐れて王国全域ピレネーを探しまわった。この三つ頭の巨人は、ピレネーが北の森に隠れていることを知るとそこに火を焚きつけた。そして誰も彼の邪魔をする者がいなくなると、イベリア南部に落ち着いた。

奇遇にもそこをヘラクレスが12の業務を成し遂げる為に通りかかり、勇ましい英雄は美しいピレネー姫を発見した。彼女は恐ろしい山火事の中を生きのびたものの、最後の息だった。死ぬ前に彼女はヘラクレスに、ジェリオがどの様に自分の父を殺して王国を略奪したか、そしてどの様に彼女が隠れている森を焼き払ったかを語った。

ヘラクレスはその話を聞いて美しい姫の死を見ると、ピレネーの為に復讐の念に駆られた。また彼の地中海において神より課せられた12の業務のうち10番目は、ジェリオの家畜を盗んでくることだった。ヘラクレスは南へと旅立ち、ガデス（Gades） の街で二つ頭の番犬オルトレ（Ortre）が見張るジェリオの家畜を発見した。ヘラクレスは二つ頭の番犬を殺して家畜を奪い取り、彼の10番目の業務を成し遂げた。しかしそれだけでは満足しなかった。美しいピレネーの死の為に個人的な復讐を果たしたかったのだ。その為にヘラクレスはジェリオを探し続けた。そしてついに彼を発見した時、両者の対決は大地を揺るがすほどの凄まじいものとなった。ヘラクレスはジェリオのそれぞれの頭に剣を突きとおして殺した。暴君の亡き後、ヘラクレスは北部の領土をジェリオの息子達に分け与えた。三つ子の息子達は父親の悪事に対する謝罪の意をこめて、ジロナ地方をジロネリャ塔(Torre Gironella) より三角形に拡大し、それぞれの角に塔を建てた。そしてピレネーが死んだ山は彼女の名誉の為にピレネーと名づけられた。

なんて壮大な物語がこのジロナの地で英雄と共に繰り広げられたことか！これは紀元前2220年に起きたノアの大洪水から554年後の話で、真実かつくり話かという確証はないが、いずれにせよ一つの良い物語である。

3 アフラの改宗

ジロナに定住する以前の聖ナルシス（Sant Narcis）について、余り多くの事は知られていない。その数少ない記録の一つは彼の助手であり弟子の聖フェリウ（Sant Feliu）と共にしたアウグスタ（Àugsburg）への旅。その旅で美しい異教徒の女性アフラ（Afra）の家へ泊まる。伝説によると、彼女はこれらの客人たちに大変心を動かされ、キリスト教への改宗を決意した。

西暦304年　アウグスタ（Àugsburg）ドイツ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖ナルシスは、彼の弟子聖フェリウと共にアウグスバーグへ到着し、その晩の宿を探していた。神に導かれ彼らはアフラの家にたどりついた。アフラはヴィーナスを崇拝する異教徒の信者だった。その女主人はこの晩その旅人達を家へ迎えいれ、召使たちに部屋を準備する様に命じた。灯りが準備されていなかったのでアフラは召使を叱りつけた。その時聖ナルシスがランプに手をかざし息を吹きかけると、一滴の油もささず着火もせずに、ランプは自ら発火し、神々しい明るさを放った。アフラはこの奇跡に驚き、旅人たちの宗教へ関心をもった。聖ナルシスと神学について一晩中語り合った後に、アフラはこれまでの人生を悔い、キリスト教の洗礼（バプティズム）を受ける為に、今までの宗教を放棄する事を望んだ。そして一週間後にアフラとその召使たち、ディグナ、エウノミア、エウトロピアはキリスト教へと改宗した。

この事はすぐに市の長官であるガイウスの耳に届き、彼はアフラを捕えて殺す様に命じる。聖ナルシスは布教活動を続けるために、アフラの母ヒラリアの家へ隠れた。そしてアウグスバークの教区をつくり、ヒラリアの家を大聖堂に変えた。初めに司教となったのはキリスト教へ改宗したアフラの叔父、ディオニスだった。

管轄者の追っ手が間近に迫りくる間も、アフラはその生涯を街での伝道・布教活動にささげた。そして西暦304年8月7日信者たちに説教をしてる最中に、アフラは捕らえられた。アフラは懺悔する事も新しい信仰を諦める事も拒否し、恐れることなく死を受け入れた。アフラはレチ川の岸辺で生きたまま焼き殺された。聖ナルシスは彼女の勇敢さに感服し、遺体をひきとって彼女のための墓をつくった。そして聖ナルシスはジロナへ旅立つ時、彼女の骨の一部を形見として持っていった。

ジロナとその近郊の村の人々は聖アフラの話に深く称賛し、数年後の西暦1344年にサント・グレゴリ地方のジネスター（Ginestar）に、彼女を称えるための祭壇所を建設し、毎年8月7日を聖アフラの日として祝う。言い伝えによると、「聖アフラの日には蝿も蜂さえも、刺すことなくおとなしくしている」とか。

4 聖ナルシスの召使

これから語る出典不明の伝説は、そんなに古いものではない。しかしココリョナの伝説と同様に、ジロナの伝説では核となる物語の一つである。これは聖ナルシスがポウ・ロド（丸い壁）の家で雇っていた、大変噂好きで、でも根は善良な一人の召使の伝説。

西暦304年　ラス・モスカス通り1番にて
(Al carrer de les Mosques, 1)　ジロナ

Creadors: Josep Tarrés i Carles Vivó

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖ナルシスの召使はアフラの大叔母で、彼がアウグスタの滞在を終えてジロナへ移り住む時に同行した。この善良な女性は百歳をこえる高齢だったが、その容姿は驚くほど若く、赤ちゃんの様になめらかな肌を持ち、堂々として肉付きが良かった。彼女は非常に優れた料理の才があり、鴨肉と洋ナシ、リンゴの中詰、黒ソーセージ等、絶妙の創作料理をした。また薬草についての知識もあり、それでどのように魔法を使うかも心得ていた。一度彼女が怒った時には、ジロナ中全ての教会を色とりどりの気味の悪い蜘蛛と蜘蛛の巣でいっぱいにした。

この召使は大変身なりを気にする人で、派手な人目を引く帽子をかぶり、鮮やかな色のドレスの裾には小さな鈴を縫いつけていた。彼女は歩き疲れた時に座るための椅子を、彼女の使用人達に担がせてジロナの街を歩いた。しかしながらこの憎めない人柄にも、一つの欠点があった。彼女はとにかく世間の噂話が大好きで、人々の私生活の事件を聞きだしては街中に言いふらした。そしてある日魔がさして、彼女は聖ナルシスにまつわる冗談をいい、それが本人の耳に届いた。怒った聖ナルシスは彼女を解雇した。

人々からとても親しまれていたこの召使は、すぐに街の笑い者となった。魂がぬけた様にふらふらと歩く彼女の姿が街で見かけられた。人々が残飯をすれ違いざまに投げつけても、彼女は全く反応しなかった。そんなある日、彼女は聖ナルシスと聖フェリウが殉死する画像を予見し、まもなくそれが現実となった。その時から彼女は今までの人生を悔い改め、貧しい人や弱い人達のために奉仕する様になった。

彼女は自分の死期が近いと感じた時、最後のせめてもの慈善行為として、ジロナ大聖堂の正面で火を焚いてミントスープを作り、病気や貧しい人達に振舞った。

彼女を埋葬する時、その大きな身体はスズメの様に軽かったと言われている。ジロナの人々はこの悔い改めた召使への追悼の想いを込めて、ジロナの石で彼女の像を作り、アラブ浴場の正面にある小さな公園、以前彼女が住んでいたあたりに設置した。この石像は神話の本を手に、よく肥えた立ち姿の召使を描写している。

5 聖ナルシスの足跡

聖ナルシスについて、彼がジロナにたどりつく以前の事はほとんど何もわかっていない。また彼の出身についても、意見が一致する説は存在しない。彼についてのほとんどの記録はジロナにいた時代、つまり彼の人生の最期にあたる部分。ジロナに来てから3年後の西暦307年、ミサで礼拝を行っていた時に彼は殉教者として亡くなった。たった数年しかジロナにいなかったにもかかわらず、聖ナルシスは文学表現においても、この通り足跡を残している。

西暦305年　ラス・モスカス通り1番にて　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

伝説によると、西暦304年に聖ナルシスは、彼の弟子聖フェリウと一緒にジロナへやってきた。そして305年の初めより、司祭監督者としてジロナに定住した。通説によると、彼は聖ナルシス通り（現在のポウ・ロド通り）と、ラス・モスカス通りの間にある家に住んでいた。この頃キリスト教は信者を急速に増しており、それがローマ皇帝の目には脅威と映った。ローマのディオクレシウス皇帝（Dioclecíus） は、キリスト教徒に対して最後の激しい弾圧を命じ、それが聖ナルシスと聖フェリウに死をもたらす事となった。

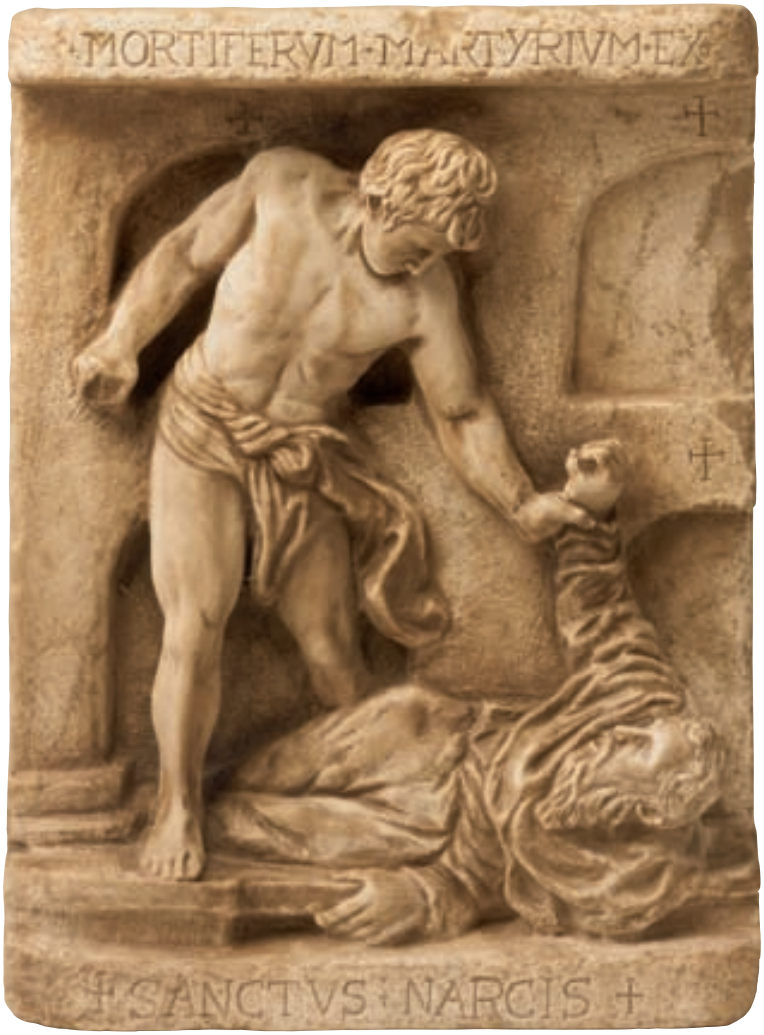
その歴史的事実から一つの伝説が生まれた。これらの激しい弾圧の中で聖ナルシスは優秀なスパイがする様な、追跡者たちの目をくらます逃げ方を思いついた。聖ナルシスはポウ・ロドの家の窓から逃げ出す時に、自分の行き先とは逆方向にむけて足跡を残した。まるで家の中へ入ったきり、出た形跡がないという様に。

追跡者たちがその家に着いた時にその足跡を見ると、聖ナルシスは家の中のどこかに必ずいると思いこんで、家中を隅々まで何度も念入りに探しまわった。そうして時間を稼いでいる間に、聖ナルシスはそこからずっと遠く離れた場所に隠れることが出来た。その時からジロナの神話における心臓部、ポウ・ロド通り5番にある家の窓には彼の足跡が残っている。ジョアン・アマダス（Joan Amades）が1952年、彼の本「カタロニアの風習」(Costumari Català) でも取りあげている様に。

この様な、聖なる足跡の崇拝は古くから世界中の様々な文化の中に出現し、それぞれ異なる方法で解釈されている。キリスト教聖者の、悪魔の、仏陀の、アダムの…足跡というように。古代ギリシャ・ローマではバクス（Bacus）やヘラクレス（Heracles）の足跡を崇めた。その風習を初期のキリスト教が、彼らの新しい宗教へ適応させたとも考えられる。ジロナ近郊には、他にもいくつか足跡がのこっている。ラス・ガヴァレス（les Gavarres）とラス・ギリェリァス（les Guilleríes）には聖マルティ(Sant Martí)とその馬の足跡。そしてカタロニアの南端、マジョルカ島やバレンシア地方にある足跡は、征服王ジェームズ一世 (Jaime I) の馬の蹄と解釈されている。

6 カタコンベ

カタコンベの語源は、ギリシャ語の“katá”（下へ）、“kynbé”（掘った穴）に由来し、地下埋葬所を意味する。初期のキリスト教徒たちが集まって祈り、遺体を埋葬し、殉教者の栄光を称えた場所。キリスト教徒に対する弾圧の激しかった時代、彼らは礼拝・祭事を行うために、都市の地下で隠れてしなければならなかった。



4世紀初期　最後の激しいキリスト教徒弾圧
聖フェリウ教会とポウ・ロド通りの近く　　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

ジロナの街はローマ皇帝が全ての都市へしたのと同じ様に、キリスト教弾圧に苦しんでいた。その為ジロナの初期のキリスト教徒たちは、カタコンベで密会しなければならなかった。他の都市にその形跡がある様に、ジロナにカタコンベがあったという物的証拠は残っていないが、聖フェリウのカタコンベについての文書が存在する。聖ナルシスの弟子、聖フェリウはカタコンベに埋葬され、何年もの間そこに放置されたままジロナの人々から忘れ去られていた。数世紀後にその墓より甘い聖なる匂いが漂い始め、ジロナ市民に彼の存在を思い出させた。ジロナの人々は彼の墓を開けて、遺体を教会の祭壇へと移した。その時からこの教会は、この聖人を称え奉献している。

聖ナルシスが住んでいた、ラス・モスカス通り（C/les Mosques）1番の家、また彼がその弟子と共に殉死を遂げた場所の近くに、カタコンベへの入り口の一つが存在したと信じられている。そして、ジャウメ・マルケス・カサノヴァス（Jaume Marquès i Casanovas）の本「旧ジロナ」（Girona vella）によれば、それはジロナ大聖堂の回廊にある井戸か、又は聖フェリウ教会（l´església de Sant Feliu）内部へと通じていた。また聖フェリウのカタコンベだけでなく、ジロナの地底には古代ローマ大聖堂の神秘的な地下室（crypt）も隠れているという説があるが、それは未だ見つかっていない。

カタコンベは街の地下の歴史を形どり、そして網目に伸びる地下道に接して存在したといわれている。地下道はジロナの旧市街全域を網羅し、市を囲む高い石壁の外側へと抜けていた事は立証されている。その例の一つとしてよく知られているのは、カルボネラ（Carbonera）のトンネルで、現在の市立美術館（Museu d'art de la ciutat）から、バリェステリェ通り（C/Ballesteries）とプジャタ・デ・サント・フェリウ通り（PJ. Sant Feliu）が交差する地点まで伸びている。また、いくつかの地下道は軍事目的に使われ、ジロネリャ塔 (Torre Gironella) 、ガリガンス川（Galligants）の水底、モンジュイック城（el castell de Montjuïc）をつないでいた。そして他に、個人の家、修道院、教会などをつなぐものもあった。ユダヤ人たちはキリスト教徒からの襲撃を受けた時、これらの地下道のいくつかを逃げ道として利用した。

おそらくいつの日か、旧市街の家一つ一つまでも調査が行われたなら、カタコンベの入り口に光がさしこみ、我々はついに地下に隠れたジロナ市の歴史を発掘するだろう。

7 カルレマニィ

中世のジロナの人々は、その時代の多くの他の都市同様に、市の創設者と考えられるカルレマニィの偉業に魅了されていた。フランク王国の皇帝、カルレマニィ (Carlemany) は実際にはジロナを創立しなかったが、西暦785年にジロナをイスラム教徒の支配から解放した。ジロナにはカルレマニィに関する多くの、かなり風変わりな伝説が残っている。長く伸びた髭の皇帝に、何らかの形で関係した建物や物品の遺産と共に。

西暦785年　イスラム教徒からの解放　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

カルレマニィの人物像は、ジロナとその創設に関する数多くの伝説に登場する。ジロナ設立における最も奇抜な解釈として、この髭の長い皇帝のみごとな刀剣がその主役を果たした。伝説によると、その昔ラ・セルバ（La selva）とエル・ジロネス（El Gironés）の地域が一つの巨大な湖だった時代に、エンポルダ（Empordà）海岸沿いの地区）の人々はアラブ人（Sarecens）に侵略されていた。カルレマニィは、エンポルダ地区をアラブ人から解放する策を思いつき、そしてその帰路にジロナを創設した。フランク王国皇帝はそのよく研ぎすまされた刀剣をもって、サント・ジュリア・デ・ラミス（Sant Juliá de Ramis）の山を真っ二つに割った。その切り開かれた場所は今日のエル・コンゴスト（El Congost）。湖の水はその二つに切り離された山の間を通り、荒れ狂う激流となってエンポルダに到達した。エンポルダは洪水となり、アラブ人たちを海の中へと押し流した。こうして、エンポルダはイスラム教徒の支配より自由になった。それからカルレマニィ皇帝は、空っぽになった湖の中心にジロナの街を築いた。

またその他の伝説では、フランク皇帝の神がかり的部分を強調している。ジロナを占領していたイスラム教徒に勝つ為に、聖母や聖人達がどのように彼の偉業を助けたかについて語っている。ジロナ征服にあたり、カルレマニィは地に落ちると十字架に変わる血の雨と、そしてジロナのモスク（イスラム教寺院）の上に燃える十字架の幻影に導かれていた。それはまさにイスラム教徒への攻撃の瞬間を予見し、アラブ人への大勝利を暗示していた。

これらの伝説はさておき、ジロナの人々は今もカルレマニィの塔を実際に見て楽しむ事が出来る。大聖堂のロマネスク調部分、旧回廊の南側に面した古い鐘の塔。それは、大聖堂の身廊の支えとなっている。レリーフのほどこされたロンバルディ調のアーチと7段の床を持つ塔、その北側の面は完全な姿で残っている。その内部には見事な祭壇があり、その背後にカルレマニィの椅子がある。この椅子はひとかたまりの大理石より彫りだされた継ぎ目のないもの。11世紀につくられたもので、ヨーロッパのロマネスク建築における司祭の椅子の中では、最も傑出した例の一つである。言い伝えによると、この椅子に男女が一緒に座るとその二人は年内に結婚し、男性が一人で座るとその人は一生独身のままなのだとか。

ジロナは、カンプロドン（Camprodón）の司教アルナゥ（Arnau）が彼の信仰を支持奨励した1345年からカルレマニィを崇拝し始めた。そして四代目ローマ法王シクスト（Pope Sixt IV）が、1484年に祝祭事を抑制したにもかかわらず、ジロナは17世紀まで彼に対する祭事を祝いつづけた。

8 毛深いギフレ

カタロニアの旗は、ヨーロッパの中で、また世界中において最も古い旗の一つ。もともとその旗は、バルセロナの伯爵達の紋章だった。それがのちに彼らの領土全域を象徴するものとなった。これらのバルセロナの伯爵の中でも第一級の名家、毛深いギフレ（Guifré）は伝説上、我々の領土を創設し、我々の旗（黄金の背景に血塗られた四本の線）の創作者となった。ギフレ伯爵は、リポリュ（Ripoll）の修道院に埋葬されている。

西暦８９７年　ギフレが埋葬されたリポリュの聖マリア修道院

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

ギフレ伯爵はおよそ西暦840年生まれ。父よりウルジェリュ（Urgell）とセルダニャ（Cerdanya）の領土を後継。そして西暦878年フランク国王より、バルセロナ・ジロナ・ベサルー（Besalú）の領域を任せられた。彼の最も偉大なる業績は、カタロニア中心部の人口を再び増加させたことだ。そしてリョブレガット（Llobregat）とカルデネル（Cardener）の西側に、イスラム教徒との国境を設置した。この調停には彼が埋葬されているリポリュ（Ripoll）の聖マリア修道院（Monestir de Santa Maria）や、アバデセスの聖ジョアン（Sant Joan de les Abadesses）の様な、教会・修道院の財団も同行した。彼の行政における晩年期、彼は自分の領土をイスラム教徒から守らなければならなかった。そしてリェイダ(Lleida) のイスラム教総裁リョップ・イブン・ムハマッド・アルオアシ（Llop ibn Muhamnad al-Qasi）率いる軍隊との戦いで負傷し、西暦897年8月11日に死去。彼はバルセロナの家紋継承における第一級伯爵であり、またフランク王国からの独立の発起人でもあった。彼は死にあたり、フランク皇帝の意向は気にもとめずに、彼の領土を息子達に分け与えた。この名家は878年よりカタロニアの行政をとりしきったが、1410年に滅亡した。古代12世紀に書かれたリポリュ修道院の本「Gesta Comitum Barcinonensium」によれば、彼はカタロニア国の創立者と考えられている。

歴史上その美点は認められているが、伝説における彼の偉業はそれだけではない。彼はカタロニアの旗、我々の旗の創作者でもある。最初の参考文献は1420年に書かれた本「Fets d'armes de Catalunya」（カタロニア軍事録）から。伝説によるとギフレは、フランク皇帝禿頭のカルロス側につき、ノルマン人に対する英雄的戦いにおいて負傷、それが原因で死に至った。彼がテントの中で傷の痛みに苦しんでいた時、フランク皇帝はカタロニアの伯爵の勇敢な戦いに褒美を与えたかった、そして軍の上着を彼に授与した。皇帝はギフレの両手を握りしめて自らの手を伯爵の負傷の血に染めると、彼の黄金の盾に四本の直線を描いた。

これらの四本線がバルセロナ軍の上着の紋章となり、のちにその領土全域を象徴するものとなった。その軍旗は世界で最も古い旗の一つ。最初にこの四本線の図案が使われたのは1150年、ラモン・ベレンゲル王4世（Ramon Berenguer IV）の盾。しかし紋章としてはさらに古く、1082年にラモン・ベレンゲル王2世の墓、ジロナ大聖堂にて1052年、彼の大叔母にあたるカルカッソンのエルメセンダの墓にも使われている。

9 寺の下の竜

ゴシック調のジロナの景観は、ロマネスク文化の上にそびえ建つ。その頃大聖堂は太古の教会の上に建てられた。言いかえるなら、ローマ寺院の上を覆う様にして建設された。そしておそらくこの寺院も古代の神聖な場所の上に建てられた。文化が繰返し、新しい信仰を象徴する為に同じ場所を選ぶのは、先者の文化・象徴の場所にふさわしくありたいという願いからか。おそらくその答えは地下で発見されるだろう。

11～18世紀　ジロナ大聖堂

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

11〜13世紀という長い歳月は、ジロナ大聖堂（Cathedral）の建設にかかった期間、それは主に聖母マリア(Santa Maria) へ捧げられた。大聖堂の建設員は、ある種の世界同胞的な（キリスト教信者ではない）石工・レンガ工職人達だった。建設にあたって象徴的造形や秘伝の意味を含む（ユダヤ教のカバラやアルケミストの伝統的要素に基づく）記号等は、主導者のみに理解された。この象徴・文様は単なる装飾ではなく、キリスト教の教義や理論に矛盾しない形で、のちに別の知識やそれらに対する解釈が付け加えられた。

この時代の大聖堂は、「特別な気（エネルギー）のある場所」すなわち地下水の流れ・地殻岩石層・磁気のある場所等、の上に建設されたと信じられている。ドルイド(Druids: 古代ケルト民族) の言語で、これらの元素的な力は“vouivre”と呼ばれ、蛇や竜とも訳すことが出来る。竜は中世の人々が恐れた謎の動物（コウモリの羽・蛇の鱗・鷹の爪…）の集合体であり、隠れた未知なる地底のエネルギーを象徴した。

神聖な場所の上に新しく建物をたてる時、この元素的な力が介入するという定説がある。これらがその時に調整となって、寺に奉仕をもたらすと。ジロナ大聖堂が、その様な力の働く場所に建てられたかも、建設にあたり石工職人たちがどの様な役目を果たしたかも不明である。しかし大聖堂のイコン（図像）研究における竜の偏在には驚かされる。竜の姿はいつもキリスト教勢力の支配下に出現する。ジロナ大聖堂の副パトロン、聖ミケル（Sant Miquel）は竜の姿をした魔物の上にそびえ立つ姿、聖ジョルディ（Sant Jordi）も竜を刺し殺している像、聖マルガリータ（Santa Margarita）と聖マルタ（Santa Marta）も、彼女達の竜を制する様が描写されている。そして、大聖堂の中を隅々まで注意深く観察すると、礼拝堂のコーベル（corbel: 壁より突出した支石）の中、ステンドグラスのバラ窓（rosassa）の中…沢山の竜の姿を発見するだろう。それはおそらく大聖堂の地底にいる、元素的な力を持つ竜を象徴しており、そしてかつてキリスト教勢力に支配された竜が、大聖堂をその特別な力で満たしているのだろう。

10 聖マウリシとカルダスの邪悪な老婆

この伝説はジロナ市から20分ほどの距離にあるカルダス・デ・マラベリャ村（Caldes de Malavella*）の名前の由来について語っている。18世紀、ジロナのメルカダル教区教会の礼拝堂の一つは、聖マウリシ(Sant Maurici) に捧げられた。そして聖マウリシの祝日である9月22日には、多くのジロナ市民がそこを訪れたという。

* Caldes de Malavella: カタロニア語で“mala”（邪悪な）、“vella”（老婆）の意。
つまりこの村名は‘邪悪な老婆のカルダス’を意味し、この伝説の老婆に由来。

11世紀　聖マウリシ城の聖マウリシ礼拝堂の建物にて
カルダス・デ・マラベリャ村　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

昔々、マウリシ（Maurici）という名の孤児の青年がいた。彼は生計を立てる職を探してカルダス（Caldes）の村へたどり着いた。気がつくとマウリシは、女帝の暴政下にある村の中にいて、人々はオオカミの仕業と考えられる村の子供達の死に嘆き悲しんでいた。同じ日に、彼はカルダスの悪名高い女帝とばったり出くわした。空腹に耐えきれず彼はいくらかの金貨を盗み、不運にもその老女帝の秘書プネストレット（Punyestret）に見つかった。

カルダスの邪悪な老婆は、若者の勇敢さを大変気に入って、彼を自分の召使にする事を望んだ。そして善良なマウリシは、村の深く下層部までも及ぶ権力を持つ暴君の、陰鬱な城に落ち着いた。しかしこの老婆は、自分の気に入ったこの青年の勇敢さが、彼女の人生に終止符を打つ事までは想像が及ばなかった。善良なマウリシは勇敢なだけでなく、好奇心旺盛で正義感が人一倍強かった。そしてこれらの気質が要因となり、彼はこの邪悪な老女の秘密をあばく事になる。ある晩彼は宮殿の道化師、小人のスクデブルク（Sucdebruc）がオオカミの仮面を頭にかぶり、大きな袋を背負って台所へ入っていくところを目撃した。怪物料理人が小人の帰りを台所の中で待っていた。その袋の中身、村の幼い子供達を調理する為に。

マウリシは料理人の不意を打って優位にたつと、彼を大鍋の中へ押し込んだ。しかし小人のスクデブルクに見つかった。一戦の後、彼はスクデブルクが気を失っている間に逃げだした。

マウリシは老婆に食事を運んだ。しかしこの時は、子供の肉のご馳走ではなく犬の肉だった。悪い老婆は憤慨したが、あらかじめ青年によりこの機会が来ることを予告されていた村中の人々が宮殿の外を包囲しており、彼らは一斉に城を燃やし始めた。我らの英雄は、悪い老婆が炎に呑み込まれる前に城から逃げ出せた。邪悪な老婆は、赤子の肉の供給なしには不死の力を失い、カルダス・デ・マラベリャ村の人々は自由を取り戻した。

11 カルカッソンのエルメセンダ

これは11世紀の頃、カタロニアの政治をただ傍観しているだけでは気がすまなかった一人の女性の物語。エルメセンダ伯爵夫人はその美貌により脚光を浴び、そして強く決断力のある性格で伝説的人物となった。その初期から彼女はカタロニアの行政に深く関わり、彼女の夫がもつ領土の行政、大統領議会、法廷裁判に直接参加した。また彼女はアル・アンダルス（Al-Ándalus:イスラム領だった頃のアンダルシア地方）への幾度と繰り返された軍事キャンペーンにさえも、夫のボレル三世（Borrell Ⅲ）伯爵に同行した。

1058年　カルカッソンのエルメセンダ伯爵夫人の死　ジロナ大聖堂

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

カルカッソン（Carcassona）のエルメセンダ（Ermessenda）は、約975年にカルカッソンのロジェー世（Rojer I ）と、ガバルダのアデライデ（Adelaide）の娘として誕生。そして993年、バルセロナの伯爵ラモン・ボレロ三世（Ramon Borrell III）と成婚。しかしボレル三世は息子のベレンゲル・ラモン一世（Berenguer Ramon I ）がまだ幼いうちに死去。そして彼女は夫の遺志により、幼い息子が成人するまでの間、伯爵に代わって行政を取り仕切りジロナ・オソナ（Girona-Osona）領土の使用権を享受した。

しかし息子が成人した後も、気の強い伯爵夫人は自分の権力を放棄する事を拒む意志を表明し、彼女の兄にあたるカルカッソンのペレ・ロジェ（Pere Roger）ジロナ司祭は、母親と息子の間に入り調停をしなければならなかった。そして両者の同意のもとに誓約書を制定した。それによると彼女の息子ベレンゲル・ラモンは、いくつかの城や土地収益も含めて、ジロナ市長の権利を一時的に母へ譲渡した。

しかし、ベレンゲル・ラモン一世は1035年に死去。カルカッソンのエルメセンダは再び、今度は孫にあたるラモン・ベレンゲルに代わり1056年まで政治を行う。

これらの権力闘争や、カタロニア政府への積極的関与などの興味深い逸話はさておき、エルメセンダ伯爵夫人は、カタロニアの教会と親密な関係を持っていたと記憶されている。ジロナ市の市長として、聖ダニエルのベンディクティン僧（Bendictine）修道院と、サント・フェリウ・デ・ギショウス（Sant Feliu de Guixols）の修道院を設立した。そして1015年、彼女は兄ペレ・ロジェと共同で、ジロナの最も重要な宗教建築、大聖堂（Cathedral）を寄付金100ウンセス金貨（unces:古代通貨）と共に、ローマ寺院の上に建設を開始した。ロマネスク調のジロナ大聖堂は、現在同様にアーチ型の天井に覆われ、三つの扉と唯一の身廊を持っていた。そしてそれは1038年9月21日に奉納された。

彼女が1058年に死去した時、本人の遺志により、彼女の墓は伯爵領バルセロナ軍の紋章と共にジロナ大聖堂へ移された。そして14世紀に儀式好きなペレ王が、彼女とその孫ラモン・ベレンゲル二世の墓を、ゴシック調装飾の墓で覆う様に命じた。その時につくられたギレム・モレル（Guillem Morell）作のエルメセンダ像は、伯爵夫人の墓の上に設置された。

12 エストパの頭のファルコン*

これは歴史的事実に基づく、時と場所が明らかな一つの伝説。1053年、バルセロナの伯爵ラモン・ベレンゲル一世（Ramon Berenguer I ）は、直系の後継者となる二人の息子を授かった。その双子は共に国を統治する運命にあった。兄弟は共に洗礼を受け、一人はラモン・ベレンゲル（Ramon Berenguer）と命名されたが、その金髪の為に'エストパ*の頭'（Cap d'Estopes）としても知られた。そしてもう一人はベレンゲル・ラモンと命名された。1082年12月5日、ラモン・ベレンゲル二世はジロナ近郊で殺され、遺体となって発見された。

*ファルコン（Falcon）：狩猟に使われる鷹の一種
*エストパ（Estope）：　ライオンのたてがみの様な繊維、亜麻（淡い黄色）。

1082年　エストパの頭の死　サント・フェリウ・デ・ヴィチャリェウ　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

この伝説は、息子ラモン・ベレンゲルの変死、彼がモントネグラ（Montnegre）で狩りをしている最中に起きた事件に起因する。その場所はガセランス地方(Gaserans)、オスタリック（Hostalric）とサント・セロニ（Sant Celoni）の間、サント・フェリウ・デ・ブィチャリェウ（Sant Feliu de Buixalleu）近郊だった。エストパの頭（Cap d'Estopes）は、彼の兄弟に「もう充分獲物を狩ったから、そろそろ引き上げよう」と言った。そして彼は、生まれたばかりの第一児（長男）と初対面する為にバルセロナへ戻ろうとした。しかしラモン・ベレンゲル二世は二度とバルセロナの地へ帰ることはなかった。遺体は伯爵のファルコンの鳴き叫ぶ声を聞きつけた農夫によって発見された。伯爵の遺体は溜池の中（現在、'伯爵の溜池'として知られる人気のない寂しい場所）にあった。その時からその場所は、'Voral de l'Astor'（大鷹の浅瀬）、'Perxa de l'Astor'（大鷹の池）とも呼ばれている。

伯爵の遺体はジロナ大聖堂へ移され、そこで埋葬された。悲嘆にくれた伯爵のファルコンは大聖堂まで葬儀の列を追いかけ、そして疲労と悲痛から、最愛の主人の棺の上に死んで落下する前に、ベレンゲル・ラモンの上を何度も弧を描いて飛んだと言われている。

ベレンゲル・ラモンはその殺人犯と直接関係があったに違いないと人々は信じた。そしてその日よりベレンゲル・ラモンは'兄弟殺し'とささやかれた。また伝説によると、その葬儀の式典で、聖職者たちは説明のつかない誤りをし、聖歌を合唱すべきところで'Ubi est Abel frater tuus?'（あなたの兄弟、アベルはどこにいる？）と、繰り返すばかりだったとか。

その時からずっとラモン・ベレンゲル二世の遺品は甲冑や刀剣も含めて、ジロナ大聖堂の修道院礼拝堂にある旧聖具室の扉の上に保管されている。ジロナの人々は忠誠を尽くしたファルコンを忘れることはなかった。人々はそれを賞賛し、大聖堂の中で名誉にあたる場所を授与した。ファルコンは主人の墓の傍ら、大聖堂支部室の入口の上、アーチ型をした天蓋の中心（trusses）の一つにいる。

1385年に儀式好きのペレ王の命令でつくられた伯爵の石棺は、1982年に開かれ、そして再び石膏板で覆われた。その時に最古のカタロニアを象徴する四本線の紋章の一つが発見された。

13 雌ライオンのお尻

蝿はさておきジロナを代表する動物と言えば、ライオンをおいて他に出るものはいない。ジロナの人々はずっとこの動物に大きな魅力を感じてきた。しかし、当時の人々は動物学の知識が浅かった為に、オオカミとライオンを混同した。例えば'La Font dels Lleons'（ライオンの泉）という地名は、その地域に…オオカミが多かった為につけられた。そしてこの様な傾向から、カルデレル通りにいるもう一方の有名なライオンの性別も、ジロナの人々は混同して雌だと考えた。

12世紀　カルデレル通り（Carrer Calderers）　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

以前ペロレルス通り（C/Perolers）として知られた、カルデレル通り（C/Calderers）の19番地に、ライオンが登っているロマネスク調の石柱があった。おそらくこの彫刻は、中世から現代にかけて営業していた有名なホテル'Hostal de la Lleona'の自慢の目印として使わていた。このホテルはとても恵まれた場所、市への玄関口にあり、フランス側から来る全ての旅行者がそこへ泊まった。

その彫刻が雄ライオンを表現しているにもかかわらず、当初人々はまず猿と混同した。おそらくそれが登っていた為に。そして後にそれは雌ライオンとして、ジロナの神話の一部と化した。

その柱の像の位置がそれほど高くなかった為、人々が爪先立ちをして腕を伸ばせば、その獣の像に手が届き、お尻に触ることが出来た。カタロニアの人々は根から下品な話題が好きなので、その行為を儀式化した。その雌ライオンはたちまちジロナ市民と外来者の間で有名な存在となった。当時そのライオンのお尻に触る又はキスをするという行為が、ジロナへ初めて来た者へのある種の洗礼儀式となった。そうしてジロナ市の洗礼を受けた者は、住民登録をした後にそこから遠くに去っても、また幸福にジロナへ帰還することが保証された。この儀式には以下の格言が伴う。

「雌ライオンのお尻にキスしなかった者は、ジロナの良い民ではない」

1986年より、レプリカの雌ライオン像がカルデレス通りのサント・フェリウ広場（Plaça de Sant Feliu）、以前オリジナルの像があった場所のすぐ近くに設置され、その儀式がしやすい様に階段もつけられた。

オリジナルの像が市立美術館（museu d'art de la ciutat）で人々の訪問を歓迎している間、レプリカの雌ライオン像は今もそのお尻に、ジロナの人々と訪問者達からキスを受けつづけている。

14 オオカミ通り

現在プジャダ・デル・レイ・マルティ・ルマ（Pj del Rei Martí l´Humà）として知られるオオカミ通り（El carrer del Llop）は、いくつかの謎を隠しもつ。その通りは1750年に洪水による被害を防ぐ為、標高を一段上げられた。つまり現在一階にあたる部分は以前二階だった場所で、かつてベランダがあった所に、今は玄関の扉がある。通りを一段高く埋立てるにあたり、おそらく聖フェリウ（Sant Feliu）に捧げられた西ゴード族寺院の内陣の様な、歴史の一部までも覆い隠された。しかし一つの奇妙な彫刻が、その埋立て工事の中を生き残った。

12世紀　レリーフ（浮彫）の記録　プジャダ・デル・レイ・マルティ通り　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

ジロナの旧市街、ソブレポルタス（Sobreportes）の門の正面、ガリガンス（Galligans）川の近くに、プジャダ・デル・レイ・マルティ・ルマ（Pujada del Rei Martí l'Humà）通りがある。暗く狭く湿っぽい、古い石の匂いがする通り、そこが昔はオオカミ通りとして知られていた。その通りに現在は市立美術館に展示されているレリーフ彫刻、マグサ（扉や窓の上につく渡し木）につける石彫があった。それは、ライオンの様なたてがみをもった大きなオオカミが、一人の少年をむさぼり喰う姿を描写している。

このレリーフ彫刻は、昔この通りで実際に起きた、いくつかの悲劇的事件の記念碑の様にみえる。伝説によるとその運命の日に、飢えたライオンが聖ダニエル渓谷（la vall de Sant Daniel）から降りてきて、何か空腹を満たす獲物を探してオオカミ通りにたどりついた。そこで飢えた獣は、楽しげに遊ぶ一人の少年を見つけて襲いかかった。この時点から、その伝説はいくつかの異説をもつ。ある者曰く、オオカミは少年を連れさらい食べてしまった。また別の者曰く、何人かの狩人がオオカミを威嚇し、獣は少年を口から落とし、尻尾を巻いて聖ダニエル渓谷へ逃げ帰った。また他の者曰く、その少年は供物として、式典の最中にオオカミに食べられた。

その悲惨な事件について実際には何もわかっておらず、またかつて本当に起きたという確証もない。おそらくはその悲しい事件の後、危険に対する人々への警告としてその彫刻がつくられたのか、又は元々その通りにあった彫刻をみた人々の想像が、その伝説を作り上げたのかもしれない。それはこの通りに更なる謎を、ある一つの知られざる出来事として加えた。

またそのオオカミ通りには女子修道院があった。その正面玄関には、乳が出なくなった母親や授乳できない母親が祈祷するために乳の聖母（la Mare de Déu de la Llet）像があった。

奇妙なことに、オオカミ通りにあったこの聖母像もオオカミに関係がある。それは一匹の雌オオカミ（乳の聖母）が、ローマの都市の創立者である双子に乳を与えている姿を描写したものだった。

15 ガリガンスのセイレーン*

我々の持っている資料によれば、ガリガンス(Galligans) の聖ペレ（Sant Pere）のロマネスク様式の修道院は988年から存在した。12世紀初めに聖ペレ教会と修道院の回廊の建設が始まり、その世紀が終わる前に完成した。その修道院の小さな回廊には、とても特殊なレリーフ彫刻、四面に謎のセイレーンを持つ一つの柱頭がある。ガリガンスの修道院のセイレーンは、長い髪・女性の体・魚の尾ヒレというような典型的な姿をしていない。

*セイレーン（Sirena）：　上半身は女性・下半身は魚の姿をした、ギリシャ神話に出てくる怪物。

12世紀　ガリガンスの聖ペレ修道院　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

このジロナのセイレーンは、女性の上半身と一つではなく二つの魚の尾ヒレを持っている。ガリガンスのセイレーンは、水上に浮かび瞳を大きく見開いて、二つの尾ヒレの先を両腕に抱え持つ。それぞれの尾の付け根にある描写は、男女の性を象徴しているかに見える。その由来・意味を解説するような参考文献が存在しない為、この例外的なセイレーンの謎は深まるばかりだ。

全ての文化は各々の信念体系のもとに、未知なる存在を説明する為、そして危険・脅威・美徳・罪の象徴として、神秘的な獣をもちいた。セイレーンに関する最初の参考文献によれば、古代ギリシャ・ローマ文化の中で、東洋文化の神秘的な獣を採りいれたと言われている。セイレーンはその美しい唄声で船乗り達を魅惑し、その結果彼らを岩場に打ちつけた。ホメロスのオデッセイで、ウリセス（Ulysses）はセイレーン達の歌声の誘惑に耐える為、船の帆柱に自分の体を縛りつけるように頼んだ。キリスト教は、多くの古代文化の象徴を採りいれて教義化しており、その中の一つとしてセイレーンの像がある。

ギリシャのレスボス島（Lesbos）の、ミテレネ(Mitelene) の祭壇の上には、二つの尾ヒレを両腕に抱えた、ガリガンスのセイレーンとそっくりな像がある。中世の美術は、このギリシャの象徴を採りいれて、しばしばその長い髪は、魚の尾ヒレと混同された様だ。ベアト・デル・ブルゴ・デ・オスマ（Beato del Burgo de Osma）の細密画の一つ、「バビロニア」（Babilonia）では長い髪を広げた一人の女性を描写しているし、バスク・ロマネスク美術におけるセイレーンは、ガリガンスのものと大変良く似ている。

中世の柱廊は神意により、現世と俗界の結合を表現することで教訓を伝える、という素晴らしい要素を兼ね備えている。セイレーンが休息する水は、神を冒瀆する汚れた水として、魔力と危険を意味し、セイレーンは贅沢・華美の象徴だった。そして中世のセイレーンにおける二つの尾ヒレと各々の性は、その象徴のもつ意味をより強調している。おそらくガリガンスの聖ペレにいる、オレンジの様に大きく瞳を見開いたセイレーンは、贅沢がもたらす罪と危険に対する、当時の信者達への忠告だったのだろう。

16 城の息子

伝統的社会は、行儀作法において厳格な規則を持ち、その掟をやぶる者には刑罰を義務づけていた。それにもかかわらず、時に神意の力は社会が明らかに非難した過失を許すことがある。それが交際していた恋人の子供を身ごもった、聖クレウ（Santa Creu）のソビラ家の娘に起きたこと。

13世紀　ファルネル城　サンタ・コロマ・デ・ファルネル　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

両親はその事実を知ると、哀れな娘を家から追放した。不運な男女の選択肢はただ一つ、一緒に逃亡する事だった。彼らは家族にも知らせず、密やかにクラデリゥス（Cladells）の聖ミケル（Sant Miquel）のエルミタ*で結婚した。そして一緒にここで暮らそう、という僧の申し出を受け入れた。人生はこの男女に微笑みはじめたかに見え、彼らはエルミタでの新しい生活に満足していた。しかしある不運な日に、娘は夫と善良な僧侶が殺されているのを発見した。未亡人はもはやそのエルミタにいることが恐ろしくなり、かといって家族の家へ戻ることも出来なかった。結婚した証拠もなしに、彼らが家に入れてくれるはずがなかった。

出産まであとわずかとなり、絶望的な状況は彼女を旧ファルネル城の遺跡へ導いた。迫りくる陣痛に耐え、休息する為に。哀れな娘は慰めを求めて、城の足元にあるファルネルの聖母（la Mare de Déu*）のエルミタを眺め、不運の渦中で切実に救いを懇願した。その時、城の壁から一筋の輝く白い光がさしこみ、どこからか一人の美しい女性が現れて、未亡人が男児を出産するのを手伝った。その美しい女性は、他でもない聖母その人だった。聖母はその赤子を、息子を亡くして間もない夫婦に託し、二年間世話をする様に頼んだ。

そして二年後、その夫婦はファルネル城へ子供を返しに行った。聖母は子供を大切に育てた報酬として、女のスカートに付いた袋を何か重いもので満たした。そしてその夫婦に、家につくまでその中身を見ない様に忠告した。しかしその夫婦は待ちきれず、道中で立ちどまりその不思議な報酬の中身を見た、それはただの土の山にすぎなかった。夫婦は腹を立て、その土を捨ててから家へ帰った。女が家でエプロンをはずした時に、土くれが床にこぼれ落ち、それは1ユンサ金貨（旧貨）に変わった。もしその夫婦が聖母の言うとおりにしていたら、大金持ちになっただろうに。

ソビラ家の娘は尼僧となり、彼女の息子は勇敢で慈悲深い子供に育った。そして、皆から「城の息子」として知られた。

*エルミタ（ermita）：人里離れた場所にある、聖人・神を奉った小さな祈祷所・僧院。
*la Mare de Déu　:'神の母'の意、イエス・キリストの母、聖母マリアのこと。

17 ジロナのユダヤ人

ディアスポラ（diáspora: ユダヤ人の分散）は西暦70年頃に始まった。ジロナのユダヤ人に関する文献で最初のものは9世紀。そして11世紀には既に市内に独自の街（call）を持ち、1492年のユダヤ人追放までコミュニティ全体がジロナに根付いていた。これらのコミュニティ共存という遺産の中、我々は伝説となったいくつかの個人的な物語をみつけた。

1270年　モッセ・ベン・ナマン/ボナストルック・デ・ポルタの死
ユダヤ人街（call jueu）　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

西暦1194年、ユダヤ教の暦では4954年、ジロナ生まれのモッセ・ベン・ナマン（Mossé Ben Nahman）は、ナマニダス（Nahmánides）、又はカタロニア名、ボナストリック・デ・ポルタ（Bonastruc de porta）としても知られた。彼はジロナのユダヤ人コミュニティのラビ（rabi:ユダヤ教僧侶）だった。彼の著作は、ペニンシュラ・イベリカ（旧ポルトガル・スペイン）におけるユダヤ文学の中で最も重要なものの一つとされている。ジェームズ王一世は、ユダヤ教からキリスト教へ改宗したパウ・クリスティア（Pau Cristiá）とのバルセロナにおける激しい論争の中、彼をアラゴン王国のユダヤ人コミュニティ代表に任命した。ユダヤ教防衛の後に、王から支持されていたにもかかわらず、教会はナマニダスを強制追放した。1276年、彼はアッコー（Akko）の町に辿りつき、76歳でこの世を去った。しかし死ぬ前に彼はエルサレムにシナゴーク（sinagoga:ユダヤ教礼拝堂）を創設し、それは1585年まで機能していた。

その間すでにカスティリャ王国全域に広まった反ユダヤ主義の波が、ついにジロナへ到達した。1391年8月10日、ユダヤ人街（Call）に対する暴動が起こり、管轄者たちはそれを制御する為に、ユダヤ人をジロネリャ塔（Torre Gironella）の中に閉鎖した。しかしそこは牢獄と化した。ユダヤ人はキリスト教に改宗した者のみ、塔から出ることを許された。ジロネリャ塔のユダヤ人の中で、ビラリッジのフランセスク・ギリェム（Francesc Guillem de Vilaritg）はキリスト教へ改宗した。

しかし彼の妻トルラナ（Tolrana）は改宗を拒否し、塔の中に残った。9月27日にフランセスク・ギリェムは、彼の弁護士フランセスク・セルヴェラ（Francesc Cervera）を塔に送った。トルラナに「夫はあなたに、彼と一緒に来ることを要望している」と伝える為に。しかし彼の妻トルラナは、改宗することも、改宗者の夫と住むことも拒んだ。キリスト教信者と異教徒の婚姻は、当時のカソリック教会の規定に反した。公証人ルイス・カルボネル（Lluís Carbonell）はこの事件を記録した。伝説によると、彼女はユダヤ教から改宗するくらいなら、むしろ自殺する事を選び、ジロネリャ塔の天辺から身投げしたという。そしてその時より、トラムンターニャの北風が吹く寒い夜には、ユダヤ人街の細道でトルラナの亡霊の悲しい歌声が今も聞こえてくる。

状況はユダヤ人にとってますます悪化し、1490年には宗教裁判の法廷がジロナに設置された。そして2年後の1492年4月30日、カソリック教会のフェルナンド王（Fernando）より通知が届く、それはアラゴン・カスティリャ両国から全てのユダヤ人を追放する布告状だった。7月12日、ジロナのユダヤ人コミュニティ：アルジャマ（Aljama）は、所有地・資産の全てを売却し、1ヵ月後の1492年8月、公式にジロナにとどまるユダヤ人はもはや一人もいなかった。

18 聖ナルシスの蝿

ジロナは際限のない近隣国からの攻撃に苦しんできた。3世紀から最後の1874年までに、少なくとも30回は数えられる。それら全ての攻撃によって街は破壊され、多くの市民が亡くなった。しかし1285年、ジロナ市民は聖ナルシス（Sant Narcís）と、彼の蝿軍隊の助けを得て、全ての敵軍、おもにフランスからの軍隊を撤退させる事が出来た。1288年、年代史記録者ベルナット・デスクロット（Bernat Desclot）によりまとめられた、その歴史的事件を見てみよう。

1285年　フランスの大胆王フェリペの攻撃　聖フェリウ教会　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

ジロナは、アウグスタ（Augusta）へ通じる道の側らにあるという地理的位置関係から、政治・商業・軍事的理由で、常に誰もが欲しがる羨望の街だった。フランスの大胆王フェリペ（Felipe）は、バルセロナ公爵ペレ王 (Pere) と、アラゴン王との領土問題の論争が原因で、ジロナへの攻撃を決意した。1285年、フランス国王率いる軍隊がジロナに到着し、ジロナ市民とペレ王の軍隊が、六月から九月まで数ヶ月に渡って防衛した。フランス軍は、ジロナ市を征服する事は出来なかったが、市を囲む壁 (muralles*) の外側にいくつかの場所を占領した。聖フェリウ教会（L'esglèsia de Sant Feliu）は、壁の外側にあった為に、大胆なフェリペ王の軍隊はそこを兵舎として占拠した。フランス軍は街を征服出来なかったことに激怒し、聖ナルシスの墓を汚して遺体をその周辺にまき散らした。幸運にも一人の大工がその事件を目撃し、彼は聖人の遺体を拾い集め、木製の棺を作りその中に納めた。そしてその同じ日に、その大工は非凡な出来事の目撃者となった。彼は聖ナルシスの棺から、どのように風変わりな蝿の大群が飛び出してきたかを、目の当たりにしたのだ。

普通のサイズより大きいドングリほどの身丈で、色は青みを帯びた緑色の、頭には大きな毒針をもった何千匹もの蝿が、一斉に飛び出してきた。巨大な緑の帯と化した毒蝿部隊は、耳をつんざく羽音をたてて、街を占拠したフランス軍めがけて飛んだ。毒蝿は急降下するとフランス兵と馬たちを直撃した。その毒針に刺されたものは、激しい痛みの中で死んでいった。ついには兵士たちの悲痛の叫びと、馬のいななきの中で、フランス軍は撤退しなければならなかった。それはフランス側に莫大な数の死をもたらした、数千頭の馬とそれ以上の数の兵士、そして国王さえもフランスへの帰路の途中で命を落とした。

1285年の戦いから、ジロナは攻撃を受けるたびに、強力な毒蝿部隊が街を守る様に、聖ナルシスの墓を市の壁まで運んだ。最期のフランスからの攻撃は、1808年から1809年のナポレオン（Napoleón）率いる軍隊によるものだった。この時は蝿軍隊は出動しなかったが、ジロナ市民は聖ナルシスの御加護の下、1809年12月10日に敵軍が降伏するまで勇敢に守り抜いた。1808年11月27日、聖人への感謝を表すために公爵最上部役員会は、聖ナルシスに軍事総司令官の位を授与した。

*ムラリャス（Muralles）：　ジロナ旧市街を取り囲んでいる高い石造りの壁

19 カステリョの牛の呻き声

伝説はしばしば、説明がつかない出来事をわかりやすくする為に湧きだす。例えば苦しい戦の大勝利、直立する石、湧水、橋…そして不可解な叫び声さえも、一つの伝説を通して説明されうる。また伝説は社会において容認される生活態度と、それを破る者への刑罰を示す事にも役立っている。今回は鳥の鳴き声がどのように我々に警告するか、もし我々が欲深いと何が起こりうるかについて見てみよう。

1333年　カタルニア飢饉の年　カステリョ・デ・エンプリアス　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

14世紀の頃、エンプリアス（Empúries）伯爵ポンス・ウグ（Ponç Hug）の時代に、農作物が大変不作な年があった。伯爵は人一倍正義感が強かったので、食糧を市民に平等に分け与える為に全ての収穫物を一ヶ所に集めさせた。こうして貧しい小作農民の飢餓を防ごうとした。

しかしながらよくある話で、その地域には一人の大金持ちの男がいて、彼は他人よりも裕福な暮らしを望んだ。彼は集められる限りのトウモロコシを掻きあつめ、若い雄牛の引く荷車へ乗せた。このカステリョの強欲男は、ロゼス（Roses）まで行きたかった。そこには船が待っていて、それで遠くへ逃げるつもりだった。誰にも目撃されない為には逃亡は暗い真夜中の頃に、そしてそこへ行くにはいくつかの湖を横切らなければならなかった。

湖の足場のぬかるんだ場所に踏み入ると、雄牛、荷車、トウモロコシ、そして欲深い男は一緒に泥沼の中へと沈み始めた。湖の引きこむ力に対抗する術もなく、湖は全てをすっかり呑み込んで消し去った。そしてその事件の夜から、その場所で今も牛の呻き声が聞こえると人々は言う。背徳行為に同行させられた、無垢なる雄牛の叫び声が。

この伝説には様々な説が存在する。この湖に沈んだ男は、実はエンプリアス伯爵自身で、本当は穀物を市民達と分け合いたくはなかったという説。そして他の説では、牛の呻き声がする場所は地獄の入口と通じており、ちょうどシルス（Sils）湖の様にそれは湖の深みの上にあると考えられた。

この伝説に出てくる謎の呻き声は、自然鳥類学により解明された。その不思議な牛の呻き声は、水辺に住む野鳥 'Botaurus stellaris'（ラテン名）の唄声に他ならなかった。アベトロ（avetoro:カワセミの一種）と呼ばれるこの鳥は、沼地の葦草の中に生息し、春の夕暮れ時、繁殖期になると、牛の呻き声を思わせる様な音を出すのだ。1960年代、アベトロはその地域から姿を消したが、エンポルダ水生国立公園（Parc nacional dels Aiguamolls de l'Empordà）の保護活動によって、1983年にその鳴声は再びエンポルダ地方へ舞い戻った、つまりこの伝説のカステリョの牛の呻き声を今も再現している。

20 リンゴ

ジロナは、街を流れる四つの川と相反する関係にあった。街はそれらの川の水から、農業用水、水車、そして市民の水の消費のために、豊かな恩恵を受けていた。しかし街へ水を供給するその同じ川が、定期的に氾濫した。ジロナはこれらの川が氾濫した時の防衛策を考案しなければならなかった。最初の洪水の記録は1193年、そしてその時から四つの川を持つ街は、何回か災害に苦しめられた。

1336年　オンニャー川堤防沿いの建物　オンニャー川　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

洪水はジロナにとって、循環回帰する魔物的存在だった。メルカダル地区の住民は、グエル川（Güell）とテル川（Ter）の、聖ペレ地区の住民はガリガンス川(Galligans）の洪水に苦しんだ。1336年、儀式好きなペレ王は事態を深刻に受け、オンニャー川（Onyar）沿いに堤防を築くことを許可した。オンニャー川が氾濫すると、低地であるプラザ・デ・ヴィ（Plaza del Vi）やシウタダンス通り（C/Ciutadans）にまで被害が及んだ。人々は街のより高い場所に避難しなければならなかった。1732年以降、ジロナ市民は安全な橋を架けることを考案した。その橋は頻繁に洪水が起こる通りの二階の高さに設置し、街の最も高い地域、フォルサ通り（C/Força）とプジャダ・デ・サント・フェリウ（Pj. Sant Feliu）に通じるようにした。そしてもう一つの対策は、堤防にいくつか穴を開け、街の外へ水が抜けだす様にした。しかしながらこれらの人類の巧妙な対策さえも、四つの川から市民を守るに至らなかった時、ジロナの人々は祈り、信仰にすがるより他に救いの道はなかった。そして聖ナルシスのリンゴをいくつか川へ投げ与えた。

これらの小さな赤いリンゴは、バニョレス近郊の聖ナルシスの信者団体の地主のもとから来た。聖ナルシスの祝祭日、祭りの続く八日間リンゴを聖ナルシスの墓の上に置き、祭りの後に敬けんな信者達へ分け与えられた。そのようにして清められた神聖なリンゴは、一年またはそれ以上の効力を持ち、洪水が起きた時に川の水を鎮めると言われていた。オンニャー川沿いの家々の住民たちは、そのリンゴを食品貯蔵室に保存し、洪水の危険が迫ると水を鎮める為それらを川へ投げ入れた。

この儀式はローマ人が、ティベル川（Tiber）が氾濫した時に川へ生贄を投じた、人身御供の儀式からきている事に間違いない。その儀式はその後他の文化においては、藁やパンの人形で代用された。そしてリンゴは人間を象徴していた、もちろん信仰のもと厳選された神聖な供物として。

1835年、土地相続問題の過程は、教会所有地の多くに影響を及ぼした。聖ナルシスの礼拝堂はバニョレスのリンゴ園の所有権を失い、伝統を続ける為にリンゴは購入されるようになった。この伝統は1870年頃になくなった。

21 聖フェリウと教会学校の泥棒

これらの事件の主要人物は、聖ナルシスに仕えていたもう一人の街の守衛、聖フェリウ（Sant Feliu）。この伝説は、聖フェリウが心から気がかりにしていた、ある出来事について語っている。ジロナには一人の執拗な泥棒がいて、カスラ（casulla:ミサで司祭が着る式服）や式典で使う聖具などを盗んでいた。聖フェリウはその窃盗行為に終止符を打つ為、夜間に守衛をする決意をした。

14世紀　聖フェリウ教会　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

暗闇の晩に、その泥棒は四つの川を持つ街を歩いていた。霧と闇の中にまぎれこみ、その晩の略奪品、教会学校から盗んだカスラが入った袋を背負って。その道中で、泥棒は一人の夜中の旅人と出会った。そして彼らはしばらく並んで歩き、語り合った。その不思議な旅人は、どうやってすぐにその泥棒と打ち解けるかよく心得ていた。ほどなく泥棒は旅人に、彼の秘密を打ち明けたくなった。おそらく見返りに旅人の秘密も知りたかったから。

旅人は泥棒に、他の誰にも言わないし彼と秘密を共有できると誓った。なので泥棒は彼に袋の中身を全部見せた。すると旅人は、彼が所有する大屋敷まで行き、そこに置こうと提案した。泥棒はすぐに同意し、旅人の後をついていった。そして彼は泥棒を聖フェリウ教会（l'esglèsia de Sant Feliu）まで連れてくると、「そこに全て置きなさい、ここが私の家だ」と言った。厳かにこれらの言葉を言い放った後、旅人は街の霧の中へ消え去った。

夜盗は驚愕して目をこすった。彼は何度も周囲を見回し、不思議な夜中の旅人が煙のごとく消え去ったのを確認した。その時泥棒はその教会が、つい数時間前に、自分が盗みに入ったのと同じ教会である事に気づいて身震いした。彼は袋の中身を空にして、全て教会の床に置いた。そして顔を上げた時に、大きな祭壇の奥にある像を見た。その像は彼をそこまで導いた謎の旅人と同じ顔をしていた。泥棒は、聖フェリウが彼の窃盗行為を見抜いたのだと悟った。聖人自ら、泥棒へ教えを説いたのだ。彼は二度とそのような悪事を繰り返す事はなかった、少なくとも聖人の家においては。

22 タルラ

アルジェンテリア通り（C/Argentería）では、春祭りの間ベランダからベランダへ渡した鉄棒からぶら下がる、ハーレクインの様なおどけた衣装を着た人形を観ることができる。この人形は、通行人、主に子供達の為に、疲れ知らずに繰り返し、跳ねたり宙返りしたり、鮮やかで痛快な芸をする。この人形が‘タルラ’(Tarlà) 又は‘チャト’（Xato）。この祭りは何度か中断されたものの、19世紀までは毎年開催されていた。その後伝統は復興し、タルラは聖ジョルディ (Sant Jordi) の日の頃に、ランブラ（la Rambla）とアルジェンテリア通りの春祭りに取り入れられた。

1348年　伝染病ペストの蔓延　アルジェンテリア通り　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

伝説によるとこの祝祭の起源は、恐ろしいペストが大流行した時代、1348年から1654年の間のある年に創立された。ジロナはこの伝染病に苦しみ、それはアルジェンテリア通りに強く影響を及ぼした。隔離が施行され、その通りの住民たちは道路を閉鎖し、緑色の黍（きび）でできた錠を使って家の窓や扉も密閉した。そして聖アグスティ（Sant Agustí）にペストからの開放を祈願した。唯一彼らが街と連絡をとっていたのは、ペストによる死者を知らせるゆっくりと打つ鐘の音だけだった。もし宙返りやおどけた動作をしながら通りをいく近所の男の子、タルラ（Tarlà）がいなかったら、その通りの市民にとって隔離生活は更に苦痛となっただろう。ついにペストが過ぎ去り、ただ一人の少女の死をもたらしただけにとどまると、近隣住民はタルラの励ましに感謝し、その日々を忘れない為に彼を模した人形をつくった。また聖人への感謝を表すため、聖アウグスティの日に祝祭を行う事をとり決めた。この祝祭は、18世紀まで宗教的意味を重んじて行われてきたが、特に20世紀初頭になるとその意味合いは薄まった。

毎年8月27日、聖人の日の前日に、近隣住民は緑色の黍で通りを飾りたて、タルラ役を演じる人を選出し、木製の人形を通りの上にぶらさげた。タルラについての最初の記録は1814年、それから19世紀終盤までは、木製人形のタルラと生身の人間タルラが、祭りの主役を共演した。最後の人間が演じたタルラは、1870年のカペタ（Capeta）とチャロン（Xarron）だった。

その翌日には宗教祭事が行われ、三日目には'feixina'（フェイシナ）を行った。フェイシナとは、夕飯前の軽食を街の郊外で食べることで、その様にして祭りは閉幕した。この伝統では、ジロナ市民をペストから守った黍の棒と共に郊外で焚火をし、人々にその出来事を思い出させた。

タルラの祝祭は、狂気じみた中世の祭りを思い起こさせる。それはカーニバルの様に、権力の境目を超越した祭事で、社会の階級・規律から解放されて、人々が羽目をはずし自由に振舞える数日間、日常的な社会摩擦からの逃げ場となるお祭りだった。

23 大聖堂の魔女

この物語は、魔女がいた暗黒の時代に起きた一つの事件について。魔女は人間であり、一般的には女性だった。邪悪な力を持ち、空を飛ぶことが出来て、キリスト教徒に危害を及ぼすために、悪魔と結束した人。中世のカタロニアの人々は、魔女たちを他の何よりも恐れた。そして彼女たちが市民に最悪の災難をもたらすのだと考えた：農作物の凶作・干ばつと洪水・家畜達の死・伝染病や流産…

1350年　ガーゴイル*の記録　ジロナ大聖堂
*ガーゴイル（gargoyle）：　怪物の頭などの形をした、ゴシック建築の雨水排水口

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

魔法を使えたからといって、魔女たちはその邪悪な術を使っていつも勝利をおさめていたわけではない。教会はいくつか彼らと戦う為の武器を持っていた。キリストの十字架像や、聖水…そしてそれ以上に、宗教裁判官が彼らを取り締まって拷問し、生きたまま焼き殺した。偉大なる裁判官、ニコラウ・エイメリック（Nicolau Eimeric）は、仕事に対する熱意と、彼の裁判のやり方で有名となった。ジロナである一人の魔女は、この世の制裁ではなく神意の力によって天罰を受けたと言われている。彼女の処刑の姿は、今も大聖堂にて引き続き展示されている。それはガーゴイルという形で、過去の見せしめとして、また邪悪な魔術を使おうとする者への警告として。

伝説によれば、昔一人の年老いた魔女がいて、彼女は大聖堂寺院へ石を投げつけて、善良な力に対する憎悪をあらわしていた。また別の説によれば、教会信者達の行列の通り道へ石を投げていた。その日まで彼女はいつもの様に石を投げていた、全ジロナ市民が感謝したその天罰が下る日までは: 教会の鐘が鳴り、神意の力によって、その魔女は石と化した。

ジロナの人々は、ガーゴイルと化した魔女を、大聖堂の一番高い所に掛けた。その日から永久に地面を眺めつづけ、二度と天を仰ぐ事の出来ない魔女の姿を、誰もがみることが出来る。彼女の口からは、もはや罵りの言葉も呪いの言葉も出てこないかわりに、雨が降る度に雨水が彼女の口を浄化している。

石と化した魔女のガーゴイルは14世紀中頃のもので、ジロナ大聖堂の中では唯一人間の形をしたガーゴイルなので、誰でも簡単にみつけられる。カルレマニィの塔の近く、大聖堂の下の通路を歩けば、目と口を大きく開いた魔女の姿を見ることができる。そして仕返しに呪文をかけられる心配もなく、あなたはこう叫ぶ事が出来る。

「汝は石を投げる　汝はまた石を投げうるから　汝は石のまま留まるのだ」

-Pedres tires, pedres tiraràs, de pedra quedaràs

24 悪魔の橋

悪魔とその短時間で橋を構築する驚異的技巧、一般的には真夜中か夜明けの雄鶏が鳴く頃までに、常に何ものかの魂と引きかえにして建設された。それらは我々の橋の起源に関する数多くの伝説に登場する。カタロニアには少なくとも二十の橋と悪魔に関する伝説がある。マルトレリュ（Martorell）に、オロット(Olot) に…そしてジロナ市内では二つの橋が、バニェタ*の建設技巧にその起源があるはずであるし、オロットにも悪魔の橋が一つある。

*バニェタ（Banyeta）：　カタロニアのいくつかの地域で呼ばれる‘悪魔’の通称。また先の話に出てくるジロナの有名な架空人物、‘バニャ’の愛称でもあり‘角’を意味する。

1357年　悪魔の橋・マジョール橋　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

マジョール橋（el pont del major）は、テル川とオンニャー川の合流点にあり、サリア・デ・テル地区（Sarrià de Ter）とジロナ市をつないでいる。見てのとおりその橋に悪魔の名前はついていない。しかし伝説は、どのように悪魔とその天才的な技巧が、その橋の建設に関わったかを物語っている。

その地方で最も美しい娘、マリア（Maria）は、テル川の向こう岸に住む資産家の後継ぎ息子ジャシント(Jacint) を愛していた。若い男女の強い愛の絆を見て、家族は婚姻を承諾した。結婚式の前日、マリアはいつもの様に恋人と会う為に川を渡ろうとした。しかしこの日は東からの強風が吹き、恋人達が川を渡り出会うことを妨げた。失望したマリアは叫んだ。「この川に渡す橋を架けた者には、私の魂をあげましょう！」その時、好機をつかんだ悪魔がマリアの前に現れて、「真夜中までに橋を完成してみせましょう、あなたの魂と引き換えに」と彼女に誓った。その契約は成立し、バニェタと数千の羽を持った悪魔たちが、モンセラット(Montserrat) やピレネーから石を運びだして橋をつくり始めた。しかし今となっては、マリアは自分のおかした過ちの重みを悟り、悪魔と交わした契約を後悔し、聖母マリアに助けを求めた。彼女の祈りの言葉は聞きいれられ、強風と山での地震が、真夜中前に悪魔たちが橋を完成させることを妨げ、最後の石をあちこちにばら撒き落下させた。これらの石が‘直立する石’(les pedres dretes) と呼ばれ、サンタ・パウ（Sant Pau）やサント・ヒラリ（Sant Hilari）からアロ渓谷 (la vall d´Aro) にかけて見ることが出来る。マリアは大変感謝し、罪を償うために結婚を一年間延期することを、婚約者と共に決意した。

もう一つの伝説は、こんなに良い結末ではない。ジロナの聖ナルシス地区には‘悪魔の橋’と呼ばれる橋がグエル川(Güell) の上に架かっており、長い年月その地区とサンタ・エウジニア（Santa Eugènia）村を結んでいた。その橋は1357年、モントフリャ（Montfullà）の高名な建設技士ギリェム・グラノリェルス (Guillem Granollers) が、悪魔と共同で建設したと言われている。ギリェムは魂を売りはしなかったが、それを担保にしたのだ。その橋の建設に使われた悪魔の石一つ一つと引き換えに、彼は千年間地獄で過ごさなければならなかった。そして約七百年までやりとげた。1968年にオロット行きの鉄道路線が廃止となりその橋は取り壊された。そしてその橋の石がサンタ・エウジニア墓地に運ばれたのを見るにあたって、彼はその事をさらに深く後悔したにちがいない。

25 ランブラ*の吸血鬼

ジロナの歴史ある道を、隅々まで注意深く観察して歩くと一家々の玄関石、石柱、アーチに覆われた通路、屋根下のニッチ*—それらを一つ一つじっくりと眺め、足をとられて転んだり、地面に突っ伏してしまわなければ、普通なら見落としてしまう、何人かの物静かな市民の存在に気付くだろう。

*ランブラ（Rambla）：　街の中心にある最も賑やかな大通り
*ニッチ（niche）：　像や花を飾る為の壁面のくぼみ

14世紀　ランブラのアーチ型通路にて　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

これらの石の市民達は、有名な雌ライオンや大聖堂の魔女に伴い、ジロナ旧市街の様々な場所に隠れ住んでいる。ジロナ市役所（Ajuntament de Girona）の会議室に入る扉には、自らの舌を噛み額から木が突出した男の頭像がある。この不思議な頭像は、会議をする議員達や役所の仕事を扱う公務員秘書達の英知を、そこで引き出しているのかもしれない。

そのすぐそばで同じくプラザ・デ・ヴィ広場（plaça del Vi）には、ひとつの古い玄関があり、そこに悪魔の頭像がある。この像についても、いつ誰がそこへ設置したかは不明である。記録がない為、地元にのこる言い伝えを引用したい。昔々その広場には市場があって、一人の男が金貸し業の店を開いていた。この男はジロナの人々を大いに利用して、毎回更なる金利を要求した、ある日彼の店があった場所で石と化して悪魔の像となるまでは。その時から彼はそこで、全てのジロナ市民がちゃんと税金を納めているか見張っているらしい。この人物は地元ではバニェタ（Banyeta）の名で知られている。

市内でもう一人の有名で不思議な石の人物は、ランブラの吸血鬼だ。この吸血鬼は暗く影になった、ランブラの覆われた通路の内側、2つのアーチの間の角にいる。それは小さな頭の男で長い顎鬚とコウモリの羽を持つ。その少し悪魔的な容姿にもかかわらず、彼はとてもロマンチックな吸血鬼で、そこである種のキューピッド役をして、年中無休で街を見守っている。伝説によるとランブラの吸血鬼は、ジロナ市民が恋に落ちる為に彼の魔法を使うのが好き。もし一人の青年又は娘が、好きな人を吸血鬼の像の下へ連れてゆき、相手にプレゼントを渡す事を成し遂げると、ランブラの吸血鬼はその男女に愛を開花させた。彼はそのランブラのアーチの下で、恋人同士となった男女の数だけを知っている。

26 黄金の雄牛

1492年に街からの逃亡を余儀なくされるまで、ジロナのユダヤ人達はとても裕福なコミュニティだった。常にジロナ市民の想像では、ユダヤ人が財宝を街のどこかへ埋葬した可能性が信じられていた、しかしユダヤ人の黄金は地獄の魔力と同様に考えられており、充分に気をつけなければならなかった。「黄金の雄牛」伝説と、そのいくつか異なる説は、‘ユダヤ人資産がジロナの街に埋葬されている確信’と‘その財宝を悪魔や地獄と同一視する’という二つの要素を兼ね備えている。

1492年　街からユダヤ人追放の後
‘Al Bou d´Or’（アル・ボウ・ドルにて）　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

モンジュイック（Montjuïc）の山のすそ、マジョール橋（Pont Major）側らに、採石場と橋があり、そこが19世紀まで'el Bou d´Or'（黄金の雄牛）として知られていた。噂では、そこの道が十字に交わる所に一軒の廃屋があり、その壁には大きな石の箱がはめこまれていた。おそらくその箱の中に財宝があったが、その箱にまつわる話の為に、その不思議な箱を開ける勇気のある者は一人もいなかった。

ある闇夜に四人の遊び人達が賭博で全財産を失い、互いの不運を罵りあってその道を歩いていた。彼らは一人の風変わりな男と出会い、その男は彼らに「自分についてくれば、沢山の財宝のある場所にたどりつき、それを好きなだけ取る事が出来る」と言った。この約束を前にして四人の遊び人達は、その夜の闇の深さも、嵐と雷が近づくのも、降りだした雨も気にとめず、教会の鐘の音が家へ戻って鍵をかける様に忠告していることにも気づかなかった。彼らはその男に伴って市の壁の外側へ行き、石畳の舗道を横切り、黄金の雄牛の橋を渡って、その石の箱がある家にたどり着いた。

その謎の男は暗闇の中、彼らをその家の瓦礫の後ろにある深い穴まで導くと、その穴の中の螺旋階段を下降させた。彼らは終わりの見えない階段を延々と下り続けた。その間男は、立ち止まらない様に彼らに向かって叫び続けた。四人のうちの一人があまりの階段の多さに疲れて、大声で叫んだ。「神よ我々にどうか救いを！一体この下降はいつ終わるのですか？」彼が祈りを捧げた瞬間四人の男達は穴から噴出し、空中を飛んで竜巻にのみ込まれた。そして四人それぞれが、ばつの悪い難しい場所に着地した。一人目は、サリアの橋(pont de Sarrià) の手すりをつかんで、川の上にぶら下がった。二人目は、聖フランセスク橋（pont de Sant Francesc）の同じ位置に。三人目は気づくと聖フェリウ教会の鐘にしがみついていたし、神への祈りを叫んだ四人目は、大聖堂の天使の像の上にいた。この神への祈願が二度と戻れない地獄へ続く悪魔の道から、彼らを救ったのは明らかだった。

27 聖アントニィの豚

これは一匹の奇形の子豚に同情した聖人の物語。そして子豚が彼の治療へ感謝の気持ちを表した物語でもある。ジロナの人々はこの伝説にとても心を動かされた。そして何年もの間'抽選くじ'（rifa）という形でその事を思い出した。もちろんそれは、実に賞を与えるに値する出来事だった！

16世紀　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖アントニィ（Sant Antoni）の日（1月17日）は冬における最後の祝祭、また顎鬚を持つ聖人を祝う週（la setmana dels barbuts）でもある。それはかつて春の到来を目前に、冬の終わりを告げる最も重要な祝祭日だった。聖アントニィは動物のパトロン（支援者）と考えられていた。その為家畜動物の主人達は、各々の動物を蝶ネクタイやリボンで飾り立て、メルカダルの教会の外へ連れていった。そこで宗教儀式が行われた後、動物達は清められ、聖なるパンの一片を分け与えられた。

16世紀から1882年までの間、聖アントニィの祝祭において最も重要な行事の一つは、とてもめづらしい富くじ'聖アントニィの豚くじ'だった。

この大きな利益を生みだす名物くじの背後に、一つの伝説がないわけがない。伝説によると、ある日一匹の雌豚が、生まれつき足が変形した子豚を口にくわえ、聖アントニィの前で立ち止まった。そして雌豚はその子豚を聖アントニィの足元へ置き去っていった。慈悲深い聖アントニィは、その哀れな動物の悲しい鳴声に心を動かされ、子豚を持ち上げると胸に抱き寄せた。そして変形した足を手にとり、指で十字を切り祈った。彼が子豚を地面へ下ろした時、それはかつて足に支障などなかったかの様に歩き始めた。子豚は聖アントニィに大変感謝し、二度と彼の側から離れようとはしなかった。いつでも何処へ行くにも聖アントニィについて行った。言い伝えでは聖アントニィが亡くなった時、その豚は聖人のために墓穴までも掘ったらしい。

ジロナの人々は、カタロニアの他の都市と同様に、聖アントニィを称える為に'豚くじ'を開催した。そして聖人の日には、豚を街の大通りへ連れ出し、人々にそれらがよく肥えて剛健であることを見せた。その子豚には赤いマントを着せ、尻尾にリボンをつけて、豚くじが開催される'Dijous Gras'（カーニバルの日）まで、毎日市内を歩かせた。伝統では'Dijous Gras'の日には、四旬節（la abstinencia de Quaresma: イースター復活祭まで続く40日間の禁欲・断食）を前に、沢山の豚肉が食べられていた。

28 聖フェリウの生涯と奇跡

聖ナルシスの説教や奇跡の伴侶、聖フェリウはジロナで厚く崇拝されていた。そしてジロナ市民が寺院を捧げた初代聖人となった。その寺院は彼が殉死した墓の上に設立された。その聖人の風変わりな点は、2人の'聖フェリウ'を混同していること: アフリカの聖人と聖ナルシスの弟子。名前の偶然の一致の為に、ジロナの聖フェリウは2人の聖人の生涯と奇跡を兼ね備えている、という庶民の想像を築き上げた。

1567年　聖フェリウの厳粛な雨乞いの祈祷
サント・フェリウ・デ・ギシュルス　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

アフリカの聖フェリウはジロナ出身ではないが、この地で説教をした。彼はアフリカ北部の出身で、石臼を首にぶらさげて海で溺死した。一方聖ナルシスの弟子である聖フェリウは、生まれたのも亡くなったのもジロナ。おそらく307年、聖ナルシスと共にミサを行っている最中に、殉死を遂げたのだ。聖フェリウ教会ではこの混同の中で、アフリカの聖人の遺品が安置されていた為、その間カルレマニィは弟子の聖フェリウの遺体をフランスへ運んだ。

これらの二人の聖人の特性を半分づつとり、ジロナの人々は一人の人物像を作り上げた。ジロナの聖フェリウはジロナの息子。聖ナルシスの弟子であり、彼の旅に同行し、キリスト教徒迫害から逃亡した。このジロナの聖人が、二人の聖フェリウの特性を兼ね備えて表現された:弟子の衣を装い、石臼を首からぶらさげていたのだ。

教会はその二人の聖人の混同を意識はしたものの、このジロナ市民が作り上げた人物像を尊重した。6世紀から11世紀まで聖フェリウはジロナのパトロン（後援）聖人だったが、後に聖ナルシスと彼の奇跡によりその役目を交代させられた。

聖フェリウは水と関係があった為、ジロナの人々は雨が必要な時サント・フェリウ・デ・ギシュルス（Sant Feliu de Guíxols）にある、サンス洞窟（la cala Sans）へ、聖フェリウの遺品を持っていった。そこは昔ローマ人が、聖人の首に石臼をぶらさげて海へ投げ捨てた場所だと信じられていた。人々は海岸に着くと聖人の遺品を海水に濡らし、そうすると雨が降ることが確約された。この旅は一度に滞りなく行う事は出来なかった。パナダス（Penedes）に着いたら雨乞いの一行は、祈祷する為に立ち止まらなければならなかった。ローマ人によって投げ捨てられた後、彼の友人や弟子達が半死状態の彼を海から引き上げて運び、彼はそこで息を引き取ったらしい。

1567年に恐ろしい大干ばつがあり、人々は聖フェリウへ雨乞いの厳かな祈祷を行った。しかし善良な聖フェリウは、期待に答えてくれなかった。おそらくこの時、遺品を長時間海水に浸しすぎた為だろうか。そして1568年に何度かひどい洪水が起こり、オンニャー川の水はプラザ・デ・ヴィ広場まで到達した。聖ナルシスは、彼のリンゴでそれを防ぐべきだった様に思えるが、それは別の物語で…

29 鐘‘ベネタ’

ジロナの鐘‘ベネタ’（Beneta）は、総重量4,800kg、全長1,90m、取手部分を除くと1,78m、そして鐘を打つ金槌は重さ70kgあった。その鐘の至難の創造が始まったまさにその日から、その難しい制作工程、力強い音色、予知能力についての伝説が生まれ始めた。

1574年　その鐘が創立された年　ジロナ大聖堂

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

‘ベネタ’は、ジロナ大聖堂における最大の鐘であり、その鐘の塔の中心にある。聖ベネット（Sant Benet）の名誉の為にその名前がつけられたが、その大きさ、音の重み、力強い音色から、ジロナ市民には通称‘ボンボ’（Bombo: 大太鼓）として知られていた。ジロナの人々は、それがカタロニア全土において最も優れた鐘の音色だと言う。

巨大な容積の為に、その鐘の型造は困難を極めた様だ。三度型に流し込み、三度ともヒビ割れた。ついに四度目に成功し、傷のない状態で型から取り出す事が出来た。その鐘の創立者は、その鐘がどの様な音を出すのか一刻も早く聞きたくて待ちきれなかったと言われている。そしてついに型から外された時、彼は金槌でその鐘の音を試した。哀れな職人がこの時に誤って、鐘本体ではなく取手部分を打ち、それはヒビ割れた軋んだ音を出した。創立者は自分の責任の下鐘がその様な音を出したことが大変恥ずかしく、一目散に街を去り二度と戻っては来なかった。

余りに早急に街から逃げ出した為に、彼はその鐘本来の音色を聞く事が出来なかった。それは既に大聖堂の鐘の塔に取り付けられ、かつて造られたどの鐘よりも素晴らしい音を出した。鐘‘ベネタ’は1574年からジロナ市民の日常生活を刻んでいる: 毎一時間ごと、祝祭日、葬儀の為に打たれ、そして街が攻撃下にあった時には非常事態の警報として。

鐘‘ベネタ’の足元は四人の靴職人が麻縄を引張って調度良いとよく言われた、つまり靴を縫う糸が麻縄にたとえられた。またその音の振動の為に、ベネタを強打する事は出来ないとも言われた。その強烈な轟きが、旧市街の家々の窓ガラスを全部壊しかねず、また全ての鐘打ち職人の耳を損傷しかねなかった。その伝説をさらに深く読みすすむと、この鐘には予知能力があったと言う。大聖堂に仕えている司祭の死が近づくと、鐘打ち職人が何もせずとも、人々はその鐘の音を聞いた。それは三度繰り返しゆっくりと鳴って、聖職者の死を街へ告げていた。

30 聖ナルシスとフランスの毒殺魔

さらにもう一度、いたる所に偏在するジロナ市民の保護者、聖ナルシスがジロナを救った。この時は恐ろしいペストの流行から。洪水や他国からの攻撃と共に、街にとっては最悪の災いの一つだった。そしてなんとも奇妙なことに、またもや脅威はフランスからやって来た。

1592年　初めて聖ナルシスの行列が行われた年　ペドレットの泉　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

危害を及ぼす事を渇望するベルナット（Bernat）という名のフランス人が、ジロナ地方を徘徊していた。彼はその道中で井戸や水場を見つけては毒を流し込んで汚染し、人間や動物に死をもたらした。極悪フランス人は既にエンポルダ（Empordà）、ラ・セルバ（La Selva）、そして四つの川を持つ街近郊の水を汚染して、伝染病ペストを蔓延させていた。

ジロナ市民は近隣の村々から警告されていた為に、その極悪フランス人を追跡捜査し、捕らえる事が出来た。その男を捕えた時、なぜ周辺地域の水を毒して、この街の水に手を出さなかったのか、彼に理由を尋ねた。そのフランス人は答えた「望まなかったからではなく、手を出す事が出来なかった。一度試みた時に'何か'がそれを妨げたのだ。」

そのフランス人の説明によれば、ジロナの街に入ったちょうどその時、ペドレット（Pedret）の泉のそばで、一人の不思議な人物が魔法の様にどこからともなく突如現れた。その人は司祭の礼服を着ていた。亡霊は彼の心を全て見透かしている様に、「暗黒の企みを実行する為に街へ入れば、千種類の魔力によって苦しむ事になるだろう」と彼を脅した。そのフランス人はこの出来事に怯え、その街を汚染する事をあきらめて、他の地方で悪事を働く為に街を去る決心をした。その後ジロナ市民によって捕らえられた。

この様にしてさらにもう一度、聖ナルシスはジロナを災いから救済した。彼が人々をペストから救ったのは、それが初めてではなかった。海外の地でも同様に救ったとされている。アウグスタ（Augsburg）の街での滞在中に、キリスト教徒迫害から聖フェリウと一緒に逃亡していた時、彼は聖アフラの魂を支配する悪魔との論争に勝った。悪魔は敗北を認めたが、その怒りを静める為に誰かを殺す必要があると言った。そこで聖ナルシスは、その地域の水を汚染していた竜を殺す様に申し出た。

ジロナ裁判所は、1592年10月29日の夜にジロナで起きたその事件を記録した。そしてそれ以降聖人へ感謝を表す為に、毎年聖ナルシスの祝日の前夜に、市民は彼の像を担いで儀式行列を行うようになった。

31 ペリコットの泉

水は昔も今も、最も貴重な資源の一つ。ペストを蔓延させる汚れた澱んだ水とは対照的に、泉は生命の源だ。岩の隙間から不思議と湧き出す豊富な泉は、大地と人々への神秘の賜物に見えた…その人々にとって、その恩恵は一つの伝説に値した。聖ダニエル渓谷（la vall de Sant Daniel）にはペリコットの泉（la font d´en Pericot）があり、もちろんそれにまつわる一つの伝説がある。

1631年　最初の聖母マリアの寝台像　ジロナ大聖堂

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

今日この泉の苦い水はもはや飲むことは出来ないが、昔は水ではなく上質の油がこの泉から湧き出していた。しかし泉のそばには大蛇が住んでおり、そこへ近づくものを何でも呑み込んでいた為に、ジロナの人々はそれを利用する事が出来なかった。

ある日聖ダニエル渓谷の農夫がその場所を通りかかり、おぞましい番人を間近に見た。その異様に長く気味の悪い蛇は油の泉に這い寄ると、口にくわえていた眩い輝きの宝石を地面に置いた。飲み終えると、輝く宝石を口で拾いあげ去っていった。農夫はどうやってその宝石を奪うことが出来るだろうか、と思案にくれながらその場を去った。考えに考えぬいて、ついに一案にたどりついた。その翌日、一晩中ノコギリと金槌と釘を使って働いた後にその泉へ戻った。彼はワイン樽を改造し、よく研いだ鋭い釘を外側に向けて打ち出し、ハリネズミの様な姿にした。フタには穴をあけて腕を外へのばせる様にした。

大蛇が油を飲む為に宝石を置いた場所のそばで、怯えた農夫は樽の中で待った。蛇が油を飲みにいった時、農夫は腕をのばしてその宝石を獲った。「ついに手に入れたぞ！」大蛇は宝石を盗まれたことに気づくと、頭を持ち上げて木々や石を揺れ動かす程の強烈な息を吐きだした。それは体を偽ハリネズミの上に投げ打つと、免疫性の体を巻きつけて、絞り上げ、噛み付き、金切り声を出した。彼らは道を端から端へ、上へ下へと転がった。その時農夫は、死を間近に感じて聖母へ助けを求めた。蛇は樽をしっかりと抱きしめ、沢山の釘がその体に突き刺さったまま丘を下ってガリガンス川へ、樽が石にぶつかって粉砕するまで転がり続けた。目をまわした農夫は、釘が体を貫いて死んでいる蛇を見ると、その宝石を聖母に捧げる為に走った。

この宝石は、聖母マリアの寝台像を覆う大きな金の冠の装飾に使われたと言われている。それは毎年、聖母被昇天の日（el dia de la Asunción*）に大聖堂から担ぎだされた。これはジロナで最も重要な儀式行列の一つで、1574年から現在に至るまで行われている。17世紀と18世紀のものと、二つの聖母マリアの寝台像の説があり、そのどちらかにその不思議な宝石が使われたらしい。しかし全ては謎のままだ。

* el dia de la Asunción： 聖母マリアが亡くなって肉体・霊魂を伴い天国へ昇った日

32 奇跡の綿

ジロナのパトロン（後援）聖人である聖ナルシスは、街を無数の災いや脅威（洪水・襲撃・伝染病…）から守るだけでなく、治癒行為にもその生涯を捧げている。様々な病気に苦しむジロナ市民を個別に診て、手足の捻挫や動悸、そして耳の痛みを治す。

1638年　ジロナ大聖堂

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖ナルシスは耳の痛みの為に祈祷されている。毎年10月29日ジロナ大聖堂では‘奇跡の綿’（cotó míraculós）と呼ばれるものの一片が入った小さな紙袋を信者達に分け与える。それは清められた、聖ナルシスの墓とその腐敗しない遺体に触れていた、治癒能力のある綿。この聖ナルシスの綿は耳の痛みを即座に治し、また難聴を防ぐ効果さえある。

聖ナルシスへの崇拝が始まった11世紀頃から、数多くのジロナ市民がこの聖人の治癒能力のおかげで、あらゆる種類の疾患から快復した。奇跡の綿や彼のランプの油によって、又はロウソクの‘ノベナ’（novena: 9回の祈祷）の儀式を通して。そのため敬けんな信者達は聖ナルシスへ、全ての治癒行為に対する感謝の気持ちを悦びの詩歌（goigs）で表現した:

貴殿は熱病に手をさしのべ
深い傷を診る御者
足をひきずる者　怯え縮まる者　余命僅かな者
壊れた者　囚われた者　障害をもつ者
あらゆる種類の疾患に苦しむ者
神の下　貴殿はそれらの者を治癒した…
伝染病　飢饉　戦いにおける
貴殿は特別な守護御者
そして乾期には
大地の果実を蓄える
難聴や全ての苦痛から
貴殿は祈りに答えて癒す…

聖ナルシスの御加護の名声は止まるところを知らずに、ジロナ全域に広まった。この信者の増大は、聖ナルシスがローマで聖人の列に加えられた1638年に頂点を極めた。そして1689年、国王カルロス二世（el rei Carles Ⅱ）は聖ナルシスの祝祭儀式を、ペニンシュラの他の国々や海外の地においても認められる様にローマへ申請した。

33 ランプの油

聖ナルシスの守護と治癒の力は広い地域に伝わり、異なる要素を通して示され、行われている。聖ナルシスのリンゴ、奇跡の綿…そしてランプの油まで、それらはあらゆる種類の疾患を治癒し、予防する。

1685年　カタロニア副王から聖ナルシスへ銀のランプの供物
聖フェリウ教会　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

伝説によると、聖ナルシスがミサを務めていた全ての教会では、ランプに油をさすことも、着火することも全く必要がなかった。それらは自ら点灯し、常に火を灯したままだった。すでにアウグスタでの滞在時、聖ナルシスはアフラの家でその着火能力を実証した: その家のランプに、一滴の油も入れず触ることもせずに、聖なる息を吹きかけただけで着火した。

この奇跡の着火はさておき、ジロナ市民にとってそのランプには他の能力もあった。聖ナルシスの祭壇で燃え続けるランプの油には、治癒効力があったのだ。

聖ナルシスのランプの油の治癒力を活性化する為には、小さな儀式（ロウソクの'ノベナ'の儀式）を行わなければならなかった。この儀式は聖ナルシスの墓の周囲を、火を灯したロウソクを持って九回まわる事によって成立し、そのロウソクは各回ごとに別のものに交換された。一旦その規律に従い九回の儀式を行ったランプの油を体の患部（腫物・外傷・手足の捻挫等）につけると、それら全ての疾患を治癒した。この儀式は骨折さえも防いだ。

この信仰は、特に1685年以降に益々強まった。聖人のご加護が聖フェリウ教会を取り囲む謎の灯火を通して実証された、マリスカル・ベルフォンズ（Mariscal Bellefonds）軍との戦いの一年後に。その灯火はフランス軍が撤退するまでの三日間続いた。1685年5月23日、この新たなご加護に対する感謝を表す為、副王カルロス二世（el rei Carles II）は美しい954ウンセス（旧貨）の銀のランプをジロナのパトロン聖人に捧げた。このランプはナポレオン軍との戦いの時にフランス軍に持ち去られたが、聖ナルシスのランプの治癒力に対するジロナ市民の信仰は続いた。

34 シルス湖

湖は神秘的だ。夕暮れ時には低い霧に包まれ、周囲の木々の姿を変え、月明かりが不思議な光景を映し出し幻影を呼び起こす、そしてその地域の人々の想像力を活発にする。シルス地区へ初めて定住した人々から、その湖と悪魔の力についての最初の伝説が湧き出した。

17世紀　この伝説について最初に記された文献　シルス（ジロナ）

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

シルスの住民は、彼らの意志と相反する湖と共生しなければならなかった。その水は病気を蔓延させ、農夫たちがもっと広い地域を耕すことを妨げた。さらに湖には地獄への入口が隠れていると信じられていた。そのような理由でシルス湖の物語は、それを干し上げる試みの物語である。

ペレ・ポーター（Pere Porter）の伝説は、まだそれが干し上がる以前に、彼が湖を通して地獄へ訪問した時のことを物語っている。ペレ・ポーターはトゥルデラ(Tordera) の農夫で、家族の古い借金問題を解決する為にマサネット（Maçanet）へ行かなければならなかった。その負債は既に完済された様だったが、ウスタルリック（Hostalric）の公証人はそれを登録簿に記帳する前に亡くなった。善良なペレがマサネットへ向かって歩いていると、もう一人の歩行者と知り合った、それは他でもない悪魔その者だった。しかしこの時悪魔は気の毒なペレ・ポーターに同情したのだろう、一度だけの善行を決意して彼を助けようとした。

バニェタ（悪魔）によれば、その誤解を解く鍵は地獄の中にあった。この日悪魔はそれほど邪悪ではなかったので、シルス湖と通じている地獄の入り口まで、彼に同行しようと申し出た。ついに彼らが地獄へ到着した時、ペレは地上界における沢山の有名人がそこにいるのを見て驚いた。その中にウスタルリックの公証人ジェルマール・ボンソムス（Gelmar Bonsoms）がいた。ペレは公証人に訪問のわけを説明し、ついに公証人はペレにどこでその古い負債の返済記録が見つかるかを示した、そうしてペレは地上へ戻った。シルス湖に地獄の入口があるなら、出口はバレンシア（Valencia）地方のモルヴェドレ（Morvedre）にあるらしい。しかしながらこの旅はただでは済まなかった。哀れなペレは謎の病を患う形で、通行料を支払わなければならず、それは9月1日から10月1日まで続いた。ペレは病気からだいぶ快復すると、その返済記録を見つける為ウスタルリックへのオデッセイ（旅）を続けた。諸聖人の日（el dia de difuntos: 全ての聖人・殉教者の祝日）にあたる11月1日、ペレはウスタルリックにたどり着くと、地元の人達に自分の不思議な冒険について語った。ほとんどの人はその話を信じず、彼を狂人か亡霊だと考えた。しかし亡くなった公証人の指示に従って返済記録を発見した時、誰もが彼を信じないわけにはいかなかった。こうしてポーター家の名誉は快復した。

35 リェルスの魔女達

中世の時代、カタロニアは魔女達の地だった、特にピレネーとアルト・エンポルダ（Alt Empordà）地方において。悪魔を呼び出すいくつかの儀式を通して、自らの意志によって魔女になる者もあったが、その他の場合選択の余地はなかった：家族の継承により、その誕生の日又は誕生した村が、魔女となる事を宿命づけた。リェルス（Llers）の村はそこで生まれた全ての女性が魔女で、中でも最強の魔法を使ったと言われている。

17世紀　魔女に対する最も激しい弾圧　リェルス（ジロナ）

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

中世の頃、アルト・エンポルダ地方とリェルスの村は、魔女の地方として知られ、恐れられていた。その時代全ての災いは魔女の仕業だと考えられていた。そして魔女達と切っても切れない関係にあったエンポルダ地方の人々から、数多くの伝説が語り継がれた。

あるリェルスの小作人は、彼の耕土の上空を大きな黒い鳥が飛んでいるのを見た。彼は悪の兆しを遠ざけようと拳銃を取り出して2発撃った。命中したかと思ったがその鳥は飛び続けた。その翌日、彼はどの様に二人の息子が突然死んだかを見た。司祭は彼に「それは魔女の仕業であり魔術に勝つには、清められた神聖な弾丸を使うべきたった」と言った。

リェルスの人々は魔女を恐れたが、同時に好奇心も持っていた。しかしこの様な好奇心は大抵良い結末を招かない。魔女の孫で、娘で、姉妹である少女と交際していたリェルスの青年は、それを身をもって体験した。その青年はその少女が魔女の家系であることが信じきれず、彼女達がいつも真夜中前に彼を家から帰らせるのにウンザリして、ある晩こっそり隠れてその婚約者を偵察した。その娘は庭に出てくると、いくつか不思議な呪文を唱える間にオイントメント（軟膏）を太ももに塗りつけ、瞬く間に飛び去った。その青年は彼女を追って行こうとしたが、その呪文の一部を間違えると不思議な力が彼に作用し、気を失うまでその家の屋根から地面へと弾んた。

リェルスの魔女達はとても社交的だった。毎週土曜日にカニゴ（Canigó）で催される‘十三の風の魔女集会’(l´aplec sabàtic de Tretzevents) に飛び立つ前には、他の地域の魔女達と集まって髪を整えた。そして大晦日の晩には魔力に満ちた新年を迎える為に、あらゆる種類の魔法や呪文を行った。

リェルスの魔女達がした悪事の中で最も有名な事件は、フィゲレス（Figueres）の鐘の塔の襲撃だ。魔女達は神聖な鐘の音が彼女たちの魔力を使えなくするので、その鐘の塔を壊したかった。そのため魔女達は北から吹き上げる突風（Tramuntana）の様に、その鐘の塔めがけて飛んでいった。幸運にもちょうどその時鐘打ち職人が、時を刻む鐘を打つところだった。鐘の塔は破壊されずに、魔女部隊との衝突でヒビが入っただけだった。

魔女とその象徴学は、リェルスの村で今現在も続いている。彼らが言うには、実は今も魔女はその地方にいるらしい、しかし幸い呪文や魔法は使えない様だ。

36 灯火について

聖ナルシスの活躍は1285年、フランスの大胆王フェリペ三世（Felipe Ⅲ）の軍隊に対する蝿部隊の指揮に始まり、その後もジロナが攻撃下にあるごとに続いた。今回はマリスカル・ベリェフォンズ（Mariscal Bellefonds）軍の包囲にあった時について。聖ナルシスの有名な蝿と聖フェリウ教会に出現した不思議な灯火のおかげて、ジロナは大勝利を治めた。

1684年　マリスカル・ベリェフォンズの包囲　聖フェリウ教会　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

1684年春、マリスカル・ベルフォンズ率いるフランス軍隊がエンポルダ地方からカタロニアへ侵入し、ジロナへ攻め入った。ジロナ市民はすでに幾多の攻防戦を経験しており、ジロナのパトロン（後援）聖人の新たな調停を待ち望みつつ、街を防衛する為に強く団結した。

そしてまもなく聖人のご加護が出現した: 今回はジロナで未だかつて見た事がない、いくつかの不思議な灯火を通して。5月22日の晩ジロナ市民はいくつかの不思議な灯火が、聖フェリウ教会に現れたのを目撃した。その灯火は寺院の屋根の上や、アーチ型の天井部を動きまわった。その不思議な灯火は23日と24日にも、ジロナ市民を大勝利に導く最後の戦いが始まる前に再び現れた。

この1684年5月24日から25日にかけての晩、ジロナ市民は聖人の墓へ行き、フランス軍に対する新たな大勝利を治めた事に感謝の気持ちを表した。そしてその晩に起きた出来事について市の裁判官の証言によると、午前２時に聖ナルシスの墓の上を一匹の蝿が飛んでいるのが目撃された、その蝿は通常より大きく長身で緑色だった。ジロナ市民は聖ナルシスの新たな奇跡に対面したのだと悟った。この報せは弾丸のごとく駆け巡り、教会学校はすぐにジロナ市民と、その奇跡の人物像を一目見たい管轄者とでいっぱいになった。教会の床で七つのフランス国旗が発見され、それは聖人の記念碑として保管された。

しかしフランス軍に対して起きた神意の現れは、灯火と蝿だけではなかった。他にも奇跡の力が侵入軍と戦うジロナ防衛軍に味方した。その包囲の数ヶ月前の諸聖人の日の晩に、フランス軍はジロナへの侵入を試みた。しかしメルカダルの聖スサンナ教会（l´esglèsia de Santa Susanna）の鐘、スサンナの鐘がひとりでに鳴りはじめて、ジロナ市民を起こし街を防衛する様に警告した。

37 奇跡の石

これらの事件は18世紀終盤、司教ロレンザナ(Lorenzana) の代に起きたと言われている。この司教は、聖フェリウ教会に聖ナルシスに捧げる礼拝堂の建設を始めた。街の保護者であるパトロン聖人はその案を大変気に入った様で、礼拝堂建設にあたり最初の原材を街へ提供し、建設に携わる労働者達を保護した。

1782−1792年　聖ナルシス礼拝堂の建設　聖フェリウ教会　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖ナルシスの崇拝は11世紀に始まり、それ以後全ての戦い、洪水、災害が起こる度にジロナが大勝利を治め、その信仰は益々強まった。博識な学者団体は聖フェリウ信仰の復活をむしろ望んでいたが、司教ロレンザナは市民に耳を傾け、ジロナ市民の聖人に対する厚い信仰に従ってその聖人の礼拝堂建設を決意した。

教会学校の旧回廊に建設予定の聖ナルシス礼拝堂の計画細部について司教が議論している間に、一人の年老いた羊飼が聖ミケル山（la muntanya de Sant Miquel）へ羊の群れをひき連れていた。その日何かが羊飼の目を引きつけた：それは日光の下でキラキラ輝く石だった。彼は好奇心に駆られて近づき、空前の輝きを放つ地面から突出した大きな石を見た。羊飼は知人達にその事を話し、彼らをその石まで連れていった。それは白と黒のマーブル模様の最高級の大理石で、彼らは驚嘆した。

その知らせは司教職の耳に届き、その事件は聖人の建設計画に対する了承として解釈された。そして1782年から建設が始まり、司教は聖ナルシス礼拝堂建設の為にこの大理石の発掘を命じた。

その最初の石を設置した3ヵ月後に、建設現場付近の家の一つが倒壊し、五人の建設作業員がその瓦礫の下敷きとなった。しかし一人も負傷者はなく、その事件は礼拝堂を建設するジロナ市民に対する新たな聖ナルシスのご加護として解釈された。10年後の1792年9月2日に聖人の墓はそこへ移され、最初の祝祭儀式が行われた。聖ナルシス礼拝堂は、全てこのジロナ産白黒模様の大理石で建設され、落成した。

ついに礼拝堂が完成した時、その白黒模様の大理石は使い果たされた様で、その後聖ミケル山で大理石の断片を発見することはもはや不可能だったと言われている。

38 ビエル家の花嫁

アングレス（Anglès）にあるビエル家の伝統的な農家は、16世紀から記録がある。それは壮大な要塞化された屋敷で、その主な特徴は防衛区画にある特種な塔だ。しかしその美しい土地やそこに息吹く裕福さにもかかわらず、この家が悲劇的事件の舞台となった、それは後継ぎ息子と裕福な後継ぎ娘の結婚を祝う日に起きた。

19世紀前半　アングレス　（ジロナ）

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

その結婚式の祝宴は、その地域の全ての主要人物たちが一同に会した：アングレスの修道院長、学長、教区役員、大地主、そして司祭さえも。披露宴とダンスの後に誰かが'隠れん坊'のゲームをしようと提案した、この無邪気な遊びがビエル家に悲劇をもたらすとも知らずに。

皆誰もが花嫁を見つけたがったので、彼女は良い隠れ場所を見つける使命にかられた。花嫁は塔の天辺まで階段を登った。その防衛塔は何年もの間使われてなく、盗賊がその区域を荒らしてからは物置と化していた。その塔には隠れる為の暗い場所が沢山あった。古い時代遅れとなったガラクタや、埃をかぶったアンティーク家具…そしてその部屋のちょうど真ん中に、昔田舎の家の後継ぎとなる花嫁が持参金を収納する為に使っていた、美しい花嫁の収納箱があった。花嫁はその蓋を開けて中へ隠れた。しかし一度中に入ると蓋は閉まったまま、不運な花嫁はその隠れ場所から出る事が出来なかった。

招待客達は、塔を除いてその屋敷の隅々まで花嫁を探した。随分時間が経過し彼らが探し疲れた時、もう降参したから隠れ場所から出てくる様に彼女を呼んだ。しかし返事はなく、彼らは心配し始めた。夜会も終えてついに花嫁が隠れ場所から現れる事もなく、客人達は去っていった。哀れな花嫁はそこで一人苦しんでいた。

人々は、たぶん花嫁はテル川に落ちて、急流に押し流されたのだろうと言った。又ある者達は、おそらく盗賊団ラモン・フェリップ（Ramon Felip）が花嫁を誘拐し、身代金と引き換えにして花嫁は家に戻されるだろうと言った。しかし花嫁はその晩も、そして二度と再び現れることはなかった。その数年後のある日、宿命的にその家の後継ぎ娘がその塔を登り、そこで埃をかぶった花嫁の収納箱を見つけ興味を引かれた。後継ぎ娘は箱を開けると、花嫁衣裳と結婚指輪を纏ったガイコツを発見したのだった。

39 聖カタリナの象徴主義

聖カタリナ（Santa Caterina）の像は、ジロナ地方の象徴表現に数多く登場する。大聖堂内部、沢山の礼拝堂やエルミタ、そして県立病院さえもこの聖人に捧げられた。聖カタリナは賢者を表し、また秘伝の知識を象徴している。彼女の存在を最も感じさせる場所、それは旧病院内にある薬局の中だ。

19世紀　聖カタリナ病院　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖カタリナ病院はおよそ800年の歴史を持つ。旧聖カタリナ病院は聖マルティ（Sant Marti）の信者団体によって、1211年に市の壁の外側、現在マーケットの広場がある場所に建設された。1666年にオスピタル広場（Plaça de l'hospital）に再建され、サル市（Salt）に移転するまではずっとその場所にあった。その建物は17世紀の病院建築様式を引き継いで、中心にパティオ（中庭）と教会があり、簡素な外部装飾が施されている。この建物内部に17世紀からある薬局は、丸いアーチ型の天井に覆われ、そこに装飾画が描かれている。元々その絵はバロック調だったが、19世紀に新しい装飾が依頼された。2世紀前に完成したその絵は、遠国より持ち込まれた珍しい物質から薬品を調合する過程を想い起こさせる精巧な寓話的風景を再現している。

しかしこれらの絵はアルケミスト（錬金術）の風景を模写している様にも見える。おそらくただの偶然に過ぎず、この古い薬局を装飾する注文を受けた無名の画家が、古いアルケミスト絵画に発想を得て、その店を描くのにふさわしいと考えたのだろう。

その絵画の中には多くのアルケミストの象徴が描かれている。例えばエタノール、錬金術のオーブン、瓜、カボチャ型のガラス容器、木、鹿、それらはアルケミストにおいて'人間とその奉仕により制御された自然'を象徴する。その聖人の秘伝の知識とアルケミストに着眼すると、その偶然は疑いを増し、聖カタリナ病院の薬局内天井のアルケミスト画に対する論議を呼ぶ。聖カタリナは アレクサンドリア（Alexandrine：エジプト北部の都市）の才女、秘伝の知識で有名で、市の司教の命令で首切処刑された女性ヒパティア（Hipàtia）を、のちにキリスト教徒が脚色した人物像。カタリナという名前は、その賢明さで有名となり同じような事情で亡くなったある貴婦人から採用された。先代者達は聖カタリナを偉大な母、賢明な女神と考えた。その結果、聖カタリナ病院にある古い薬局のアルケミスト画の意味については未だ多くの謎を残したまま、これらの奇妙な偶然は我々に様々な推測をさせる。

40 恋人達の泉

19世紀　コンゴストにて　ジロナ

この伝説には、様々な異説がある。しかしその全てが、コンゴスト（Congost）地区のテル川の岸辺にある苦い泉の起源について物語っている。この泉はある少女が自分のせいで二人に死をもたらし、その後悔の苦い涙の結果として湧き出した。

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

伝説によると、どちらかと言えば不器量な少女サラ（Sara）は、他の娘と交際している地元の青年アルベルト（Albert）に対する叶わぬ恋の行方を占う為に、ジプシー（gypsy）の占師を訪ねた。そのジプシーは、彼女の愛する人が永遠に彼女へ惚れ込む魔法薬を約束した。しかしその後、同じジプシーはアルベルトに「あなたは恋人を殺しその罪の為に罰せられるだろう」と予言した。

アルベルトはジプシーの奇妙な予言について考えながら、コンゴスト地区のテル川の岸辺へ狩りをしに行った。その不吉な考えをふりはらう様に、その時一羽の白い鳩が飛び立った。その瞬間何も考えずに彼はそれを撃ち、傷ついた鳥はそばの茂みに落ちた。青年はその鳩を拾いに行こうとしたが、その時自分の足が痙攣して動かない事に気づいた、足は彼の言う事を聞かず地に根付き、そして彼の体は木の幹へと変貌していった。この夕暮れの間にアルベルトは巨大な樫の木と化した、そしてその鳩がどのように血塗れた人間の姿へ変わっていくかを見ることが出来た。それは精気のない彼の恋人の姿だった。何人かの水の妖精が現れて、慌てて彼女を川の上流にある妖精の洞窟まで運んでいった。

ジプシーの邪悪な魔術は成就された。サラは最愛の人が木と化して、彼の恋人が死んでいるのを見た時、その幹にしがみつき悲嘆に暮れて泣いた。彼女は自分がこれらの死を引き起こしたのだと悟ると、深い懺悔と悲痛の中で大量の涙を流し、泉へと姿を変えていった。

その翌日ジロナの街で昨晩謎の変死体となった一人の青年と二人の少女が埋葬された。そしてこの日から約100年たった今も、コンゴスト地区にある樫の木の根元に、苦く塩辛い涙の泉が湧き出している。

41 メルカダルのパン職人

聖ナルシスの崇拝は11世紀に始まった。この信仰は時間の経過と共に、また繰り返し起こる聖人の奇跡によって益々強まった。しかし時々諸聖人はその信者達にいくつかのある条件を課すことがある。聖ナルシスは、信者達が彼の祝祭日に働く事を好まなかった。そしてメルカダルのパン職人とペララダ（Peralada）の製粉職人にその事を明らかに示した。

1864年　ジロナのパトロン　聖ナルシスとその教区
メルカダル広場　ジロナ

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

聖ナルシスは14世紀よりジロナ市のパトロン（後援）聖人であり、彼を称える為に盛大な祝祭が行われた。伝説によると、メルカダル広場（Plaça del Mercadal）とモリ広場（Plaça del Molí）の間に店を持っていたパン職人は聖ナルシスの祝祭の前夜に働きにいった。彼はその特別な日に信者の守るべき掟よりも、休む事によって失う儲けの事だけを考えて、翌日にパンを売ることが出来る様に生地をこねはじめた。彼が生地をこねていると、そのイースト生地は赤い血の色に変色し始めた。そして更に生地を裏返しこねると益々その朱色は強まっていった。パン職人はこれによって、聖ナルシスが彼の祝祭日に働くべきではないと示しているのだと悟り、大変怯えるとさらに重い刑罰を恐れて、仕事場を閉めて聖ナルシスの墓の前で許しを懇願する為に聖フェリウ教会まで走った。

その後3日間、パン職人は仕事場へ戻る勇気がなかった。彼が仕事場を開けた時、その生地は恐ろしい朱色を失い鮮度を保ったまま、まさに焼くのに調度良い状態だった。彼は安堵の息をついてパン生地を焼いた。そしてこのエピソードを今後の良い教訓として記した。

似たような出来事が数世紀後の同じく10月29日に、ペララダの製粉職人の身に起きた。このペララダの製粉職人は、この祝日に働く禁止令については何も気にかけずに仕事場へ行った、なぜならそこはジロナ市の郊外で祝日ではなかった。しかしこの時も聖人は哀れな製粉職人の仕事を妨げ、トウモロコシをおが屑に変えた。

この出来事はジロナ司教コンスタンティ・ボネット(Constantí Bonet) の耳に届き、彼は更なる重い刑罰が起こる事を防ぐ為に、ローマ法王ピウス九世(Pope Pius IX) に聖ナルシスのパトロン地区をその年1864年から全司教区に拡大する様に依頼した。その時から聖ナルシスの祝日は、ジロナとその全教区において厳しく守られている。

42 ココリョナ

もう一つ出典不明な伝説をこの伝説集にとりいれたかった。なぜならそれは力強く瞬時に広まり、あっという間にジロナ市の伝説の体内に入り込み、ジロナのイコン（図像）研究における象徴の一つと化したのだから。

20世紀　サンタ・クララの女子修道院　ジロナ

作者　ドロルス・コディナ　(Dolors Codina)
エミリ・マッサナス　(Emili Massanas)
カルラス・ヴィボ　(Carles Vivó)

ジ　ロ　ナ　の　伝　説

オンニャー川左岸のメルカダル地区に、聖フランシスコ会（clarisses）の女子修道院があった。その修道院はモナル用水路のすぐ側に地下の暗く湿っぽい独房があり、そこに一人の尼僧が錠と鍵をして閉じ込められていた。

ロサリア（Rosalia）という名の女子修練者がそこに幽閉された理由については、様々な異説がある。その主な説は、彼女はシスター達の堕落した生活が不満でいつも非難していた。そしてシスター達は彼女の非難に耳が痛く、自分達の罪深い生活を続ける為に彼女を幽閉した。またもっとロマンチックな説では、その女子修練者は恋人である聖フランシスコ僧院の僧と逢引する為に、夜になると地下道から逃げ出していた。そして当然ある日それがマザー修道女に見つかり、閉じ込められた。

確かなのは一旦この暗くジメジメした独房に閉じ込められると、その哀れな尼僧はそこですさまじい時を過ごした事だ。そしてその場所にある湿度のせいか、又は恋人を想い溢れだす涙のせいか、彼女の身体に奇妙な変化が起きた。彼女の身体はウロコに覆われ、やがてワニへと変貌した、その間背中にはおぞましい容姿を補正する様に、蝶の羽が現れた。この様にしてその尼僧は、ワニと蝶の合体…一匹のココリョナ*（Cocollona）へと変身した。

その尼僧は亡くなった後も、数年間その独房に幽閉されたままだった。そして人々が言うには、ある日一滴の雨も降らないのにジロナで洪水が起こった。その時から‘ココリョナ’となった彼女の姿が、オンニャー川を泳いだり、その上空を飛んだりしているらしい。もしココリョナの姿を見たいなら、月が明るい晩に石の橋（el pont de Pedre）と旧魚屋橋（el pont de les Peixateries Velles）の間を歩くことだ。月光がジロナの霧の中にその亡霊のシルエットを映しだすだろう。

*ココリョナ：カタロニア語でココドリル（cocodril: ワニ）とパパリョナ（papallona: 蝶）を合わせた造語

賢者の道しるべ

1946年の聖ナルシスの祝日に、バルセロナの出版社から小さな宝石の様な価値のある一冊の本が出版された。「ジロナ市の小さな歴史・その伝統と民俗学」（Girona. Petita história de la ciutat, de les seves tradicions i folklore）ジロナ出身ジベルト（J. Gibert）の著書であるその本は、「ジロナの伝統を少なくとも文面で保存する為」と彼自身が表明している様に、ジロナ市の慣習や伝統をまとめたものだった。さらにジベルトは市民の生活を注意深く観察し、地元の慣句・歌・伝統・踊り等おそらく市民にとって最も特別な、街の特色を形成している部分を日々ひろい集めた。

ジベルトの様に、ヴィボ（Vivó）、ファニャナス（Fañanás）といった他の作家達の間で今、ヌリ・ロス（Nuri Ros）が伝説集を書き上げた。彼らは伝説・幻想・伝統を調べ、それらを主題として作品をつくりあげ、その作品を通して我々皆に人々の想像から湧き出た民間の知恵を伝承した。これらの寓話や神話は、しばしば本当の歴史の中へと導く、歴史学者によって何が調べられ、裏づけられ、記録されたかを知る。

街の伝説を知る事は、その街の内部深くへ入り込むこと、そこに描かれたコミュニティの生活や思想を理解すること。だから我々は彼らに耳を傾けそれらを読む義務がある、次世代に語り継ぐ為に。その先駆けとなって制作されたこの本は、ジロナの伝説を世代から世代へ伝える為、また他の地域の人々へ広める為に役立つだろう。それは賢者の道しるべ、心から祝福します。

Arcadi Calzada i Salavedra（アルカディ・カルザダ・サラベドラ）
ジロナ信用金庫（Caixa Girona）会長

ジロナは人類共通の概念
伝説は我々を知識の後継者にする

この主題のもとに全ての情報をまとめた本を出版するとは、実によく考えられてた素晴らしい案だ。伝説・神話・物語、これらの要素は真実の歴史背景と共に我々を現実味を伴う夢へと近づける。この理由から自らの記憶したい意志によって成し遂げられた、この様な驚くべき知的活動に貢献した人々を誰もが祝福するべきである。全ての長い歴史を持つ街同様に、ジロナは伝説の街だ。神話や伝説は我々自身について、そして我々の周囲について教える事によって我々をより社交的にする、したがってその地域の人々をより結びつける。

ジェリオの伝説から雌ライオンのお尻まで、ジロナの人々とその外側からの人々の特性を見ると、その双方が我々の文化と深くつながりがある。この徹底的な再検討は優美で首尾一貫している。その一貫性は論説の徹底により生みだされ、また社会知識における人類学の枠組みを形成している。この本は人間関係における慣習について、人類とは何か、それらは何を象徴するか、またその自然背景についても記された実に信憑性の高い一冊だ。

伝説は我々をより人間らしくする、我々の中にある童心で分析させ、何かを我々に夢見させ、その感性を活発にする。伝説に魅力を感じない者は、我々から遠い存在だろうか？本質的には全ての地方に各々の伝説があり、旅行において私は幸運にもその多くを聞く事が出来た。私が何に気づいたかわかりますか？それらの伝説は全て等しく、同じ事を語っている。つまりそれらは人類における共通の概念について語っているのだ。

ジロナは人類共通の概念であり、市民はさらにそうである事を望むべきだ。自分の町や市の伝説を理解せず愛さない者は、人類共通の概念をも理解に苦しむだろう。私の科学的観点では、この本は我々をより人間らしくし、もしこの様な先導活動がなければ消えてしまったかもしれない知識の後継者とする事に役立っている。この企画を賞賛します。

Dr. Eudald Carbonell Roura（エウダルト・カルボネリュ・ロウラ博士）
ロヴィラ・ビルヒリ大学　先史学部
アタプエルカ支部　副学部長
古代人類環境生態学・社会進化学
カタロニア学会役員

ジロナは伝説を通し 語り継がれる歴史を保持する術を知った

ジロナ旧市街の散策は、その街とその魔法を発見したい、また数世紀の歴史ある街路や地元市民の感性をとらえたいと望む、全ての人にとって欠かせない行為だ。

旧市街を歩きまわれば、それら上り坂の狭い路地が沢山の歴史を隠している事にすぐ気づくだろう。そしてさらにジロナは、伝説を通して語り継がれる歴史を保持する術を知った:
雌ライオンの、聖ナルシスの、ジェリオの、そして大聖堂の魔女の。彼らを発見したら、街と同様に彼らはあなたを魅惑する、そしてジロナに根づいた伝統の中で特に優れたものを伝えてくる。

お許し頂ければ、私の最も気に入っているジロナの伝説をここで一つ選びたい。それは市内のものではなく「毛深いギフレ」である。私がそれを選ぶ理由は、カタロニアの一国民としての、我々のアイデンティティの起源がそこにある為、そして私はリポリュ出身なので。

私が常に賛同してきた諺曰く、「その起源（ルーツ）を失う者は、自己（アイデンティティ）を見失う」。今我々はこれまで以上に細心の注意をはらい、それらを保守するべきだ。だからジロナの伝説を大切にし、促進している賢明な諸君に感謝している。

Eudald Casadesús i Barceló（エウダルド・カサデスス・バルセロ）
ジロナ地区CDC代表
カタロニア州議院CIU党代表議員

ジロナの伝説と その地方は
今日石になった

メソポタミア様式の石版、ギリシャ・ローマの浮彫、そして新古典主義の墓石レリーフに引き続き、ジロナの伝説とその地方は今日石になった—と言うより大理石となった—とくに伝統への感受性が強く、伝説にふさわしい感性を持つベスカノ（Bescanó）出身の芸術家ジェラード・ロカ・アヤーツの手によって。それらの作品は我々の歴史をより深く理解する手助けとなっている。または我々の過去における混乱しがちないくつかの要素を、通訳していると言った方が適切かもしれない。

それら伝説を象徴化する意味に、今芸術的価値を加えている。そして使用された素材は決して気まぐれな選択ではないと言明しておくべきだろう。我々が長持ちする様に願うものに、石は欠かせない必需品だ。その石の中でも大理石が選ばれたのは、評判の高い何かがより崇高なものになる様に。巧みで明確な作風は、それらに教訓的意味をもたらしている。教会のロマネスク様式のレリーフ彫刻が神意によって俗人を教育する様に、それらはしばしば誇張された表現で、しかし完全に理解しやすい図案が用いられている。また我々は全体を通してのこの企画の枠組みにも敬意をしめし、心にとどめるべきだ：この場合「聖ナルシスの足跡」の様にそれ自体が伝説と化した、ジロナの心臓部に位置する中世の崇高な建物。

一つの伝説がもつスケールを、一つのレリーフ図案として具体化する事は、決して単純でも容易でもない。それをするには、特別な構図力と想像力が必要だ。誰もが皆多かれ少なかれいくつかの伝説を記憶している。しかしそれらは明確な図像ではなく、曖昧で調和もなければ細部描写もない。ジェラードは我々読者の沢山の仕事量を省いていると思う。そして彼の大理石彫刻家としての申し分ない技量に加え、これらのレリーフ作品によって彼の品格ある作風とイラストレーターとしての偉大なる才能が見いだされた。

我々皆がそれぞれの伝説についてのこれらの作品を楽しむだろう、そしてこれから更にもっと有名になるにちがいない。

Lluís Costabella i Casadevall（ルイス・コスタベリャ・カサデバリュ）
詩人・音楽家・作曲家
美術史　学士号

伝説を取り戻し
地に足をつける

全ての文明と全ての民は誕生し、神話や伝説の保護のもとに発展してきた。人類の歴史は、各々の国で発祥した神秘的な物語や伝説をたどり広がったと言えるだろう。太古エジプトのイシスとオリシスから、古代ギリシャの神々や英雄達を通して、我々の今日に至るまで、文化と国民は先祖伝来の神話の連なりに従い発展し、それらは特異性を緩和する事に役立ってきた。神話も伝説も宗教も持たない人間の集合体は、とても重要な何かが欠けている組織だ。

しかし人権と福祉の水準が高い最も先進的社会では、しばしば神話の中に出てくる様な制約を軽減し、あるがままで受け入れる術を知っていた事を付け加えなければならない：かつて一つの道具がある機会においてその民を同調させ、国に属する意識を与えることに役立ってきたが、今日ではその様な制約で歯止めをかけ、コミュニティの近代化を遅らせるわけにはいかない。

ジロナは賢明な先祖伝来の豊かで複雑な歴史を持つ街であり、これら二つの要素を両立する術をとても巧みに習得してきた：その伝説（ジェリオ・カルレマニィ・大聖堂の魔女・聖ナルシスの蝿・アルジェンテリアのタルラ…）の民間伝承の伝説文化を尊重し、それと同時に市民と訪問者の今日と明日の為に、社会福祉の水準を高める為の全ての要員を稼動しつづけている。これは過去への敬いを保ちながら、現在の為に働き続け、同時に未来の為に備えていると言える。言いかえるなら、伝説を受け入れ、地に足をつけている。

ホテル「Llegendes de Girona」の企画提案は、未来について考えながら、より良い現在の為に働き、ノスタルジックな視点で（何故いけない？）興味深い過去の見直しをする意志の良い例である。常に語られた事がそのままの事実ではなくても、少なくともそうであったらいいのにと思わせる過去について。

良い仕事に幸運を祈る。

Francesc Francisco-Busquets Palahí
(フランセスク・フランシスコーブスケッツ・パライ)
スペイン政府　ジロナ　委任代表議員

ジロナは石と水
物質と記憶

数世紀の長い歳月をかけてジロナは形成された。市の壁に守られて、街自体の活力とそこで苦しみ働いてきた男女達は、記録文書によって立証されてきた。ジロナの歴史を遡ると初期に住み始めた人類はローマ人に起源し、中世のラビリンスを経て力強い市政と宗教建築を構築した。ジロナは石と水、物質と記憶。

しかし現実的には、庶民の想像より生まれ出る部分もその形成に貢献しており、我々がその長い数世紀に渡る進化を理解することに役立っている。ジロナもその例外ではない。語り継がれてきた伝説がその街の外殻となって、最上級に豊かな内部を守っている。

Anna M, Geli（アンナマリア・ジェリ）
ジロナ大学　学長

一軒の家の隅々まで
一つの歴史、一つの伝説が
想像出来る

ホテル「Llegendes de Girona」（ジロナの伝説）を実現可能にする人々の一員であるとは何と名誉な事だろう。

私の建築技師としてのささやかな貢献は、ジロナ旧市街の歴史の一部を形成すること、特にその隅々まで一つの歴史、一つの伝説を想像させる一軒の家を復元する事だった。その期待に答えるべくホテルにつけられた名前を心から祝福する。

モルガットの伝説についてここでふれたい。それは私の個人的なポラスケス市長とのつながりから、最も私に影響を与えている物語、そして私にとって最も印象深く考えさせられる伝説の一つと言うべきだろう。我々は物語を遠い昔の事であると考えがちだ、少なくとも私はそう感じてきた。それに対してモルガットの伝説はその背後に現実味を伴う。我々のようにその地域について多少知っている人々にはそれが理解出来るだろう、実際にその目で湖の変わりゆく姿を確かめることが出来たのだから。長い年月の中で異なる湖は形成されつづけ、そしてこれからも形成されうる、特にちょうど我々がいる現在の様な干ばつの時期には。

Xavier Gifra i Darné（チャヴィ・ジフラ・ダルネ）
建築技師

ここにあなたの不思議な
ジロナへの訪問が始まる

伝説は代々伝統的に語り継がれた、又は文書で残された物語。散文体や詩歌で、そして多かれ少なかれ歴史的な形で、その大部分又は少しの想像的な要素を含んでいる。

伝説は一般的には気づかないうちに創作され自然と湧き出しているが、深い学識者によって、又はそれら二つの要素の組み合わせによっても有名になりうる。それらはもともと文学的背景を持っており、のちに有名な物語となったとも考えられる。

それらがどれくらい長い話かにかかわらず（一般的には短いけれども）、一つの伝説が明示する事がその主題であり真意である。伝説は常に幻想的な物語を通して自然現象を説明しようとする意志に基づいているのだから。

我々ジロナ市民はホテル「Llegendes de Girona」を観察し、ジロナが帝国であった頃のものも含めて、数多くの伝説に魅了され恍惚とするだろう。ジロナの魔法はその伝統と伝説の中に発見される、通りを賑わす都市部のものも含めて。

このホテルの中であなたは沢山の隠れた側面を発見するだろう。ここにあなたの不思議なジロナへの訪問が始まる。

Fernando Lacaba Sánchez（フェルナンド・ロカバ・サンチェス）
ジロナ県最高裁判所　裁判長官

我々の世代は 伝説を樹立する可能性を拒まれた

伝説は人間社会における、いかなる非凡な出来事も継承する意志の中に深く刻み込まれた。それを第三者や新しい世代へ伝える為に。そこには不滅の何かが必要不可欠であり、時を超越して、時の経過の中で定着していく必要がある。

我々の世代は伝説を樹立する可能性を拒まれた。事実はそのままの事実であり、その主要人物と証人がいる、その上それがどこで起こった事でも、我々はほぼ直接的に見る。客観性だけが残り、我々の天性の洞察力をもって事件を主観的に見る事は拒まれている。これは技術進歩の結果であり、人類の子孫はその進化の奴隷と化した。もし全ての伝説がその正確さよりも想像力に基づき、又全ての伝説がそれ自体潜在的に進化するならば、今日例えば戦争の全行為が、爆弾の爆発や人類の悲劇さえも生放送される時代において、もはや伝説を作り出す事も樹立する事も、現代の象徴として残す事も不可能であると言明したい。それらは時間の経過の中で消え去り塗りかえられていくに違いない。

今のホテル「Llegendes de Girona」の元々の建物が旧市街中心部に建設された時代は、決して平凡な日常ではなかった。この場所がその時代の街に心臓を与え、我々全市民と我々の過去に魅了されて訪問する人々がその恩恵を受ける場所として鼓動し続ける為に、今日の経済活動と道徳感情における充分な強度をもたらした。そして賢者の手によりその復元が今成し遂げられつつある。

新聞もラジオもテレビも映画も、言うまでもなくインターネットも無かった時代において、出来事は口から口へと伝わり、その過程で語り手の想像によって充分に調理されて広まった。伝説は発端と結末を同時に持ち、詩的な美しさが織り込まれた、確かな事実に付随した物語。それは肉体を持ち、魂をも持つ。その魂は不可能を可能にして我々を魅了する。何が起こったのか？この場合我々がその伝説の筋を見いだすべく色々想いをめぐらせている間、我々は「Llegendes」（伝説）という名を有するに値する度胸あるホテルのサービスを楽しむ事ができる。それは今日の時代に設立された一つの明確な、印された、測量可能な事実だ。我々も我々の個人的な伝説を、静寂の内の成果として残しませんか？私はあなたにそうする事を提案する。そして彼らが言う様に、我々の心臓部である古代ジロナの旧市街を隅々まで再発見する事を。

Josep López de Lerma（ジョセップ・ロペズ・デ・レルマ）
ジロナ講談会「Tribuna Girona」会長

ジロナ市の歴史は
独自の強さを持つ

ちょうど一軒の家が一つの家族の為にある様に、街はその社会の為に存在する。そして各々の家族が独自のやり方でその個性と性格に基づき、私的で必要不可欠な空間を形成し続ける様に、社会はその住民全体、その国の端まで、又海外の文化においても賛美に値するべく、その都市空間を創造し形成しつづける。

我々誰もが、個々に家である種の物を楽しむのが好きだ。我々の感覚を別の世界―個々の状態でそれぞれの感情・感覚をより親密にし、我々をより豊かな世界へ到達させてくれる物、彫刻、絵画、建築…。そう考えると街は、我々皆の為の巨大な家だ。

この街はその石とその民と共に、自然界における人間を反映している。四つの川を持つ魅力的な街ジロナは、その始まりから常に文化的・芸術的でありつづけ、独自の個性を刻印してきた。その彫刻、教会、家の隅々までも、そして全ての石は街の形成に立ち会ってきた―戦争、襲撃、祝祭、伝説、革新、興行、産業の導入、大きな社会運動、ここ30年間における変遷…しかしそれら全てはそこに留まり、次々と起こる変化を黙視し、それぞれ永遠の場所で理解している。

その様にして、伝説によれば1700年前に、ジロナの司教で、殉教者で、パトロンであった聖ナルシスが住んでいた、そして今も彼のエッセンスがそこに生き続けるこの偉大な家は、前向きに同じ方向で進化し続け、今ジロナの歴史へ世界中の人々が深く入り込んでくるであろう一つの企画と向かい合っている。その歴史は独自の強さを持ち、賞賛に値する。

Oriol Mallart i Vallmajó（オリオル・マリャート・ヴァリュマジョ）
La Salle（ラ・サリェ）建築学校
建築科　学生

四十二の不思議な物語
ジロナの伝説

伝説は通常口頭で語り継がれたと考えられている、多くの想像的・神秘的要素と共に、時には宗教的な主題で、または異教徒の、その多くは分かりやすく庶民的で、ほとんどが歴史的な起源を持っている。だから誰かが四十二の伝説を一つにまとめると、今回ホテル「Llegendes de Girona」がそれを成し遂げたのだが、街の歴史の良い部分が寄せ集められている。それぞれ異なる歴史、しかしその一つ一つが重要なのではなく、その街で生まれ暮らしてきた人々、又はある日おそらく偶然そこに留まった人達によって、徐々に一つにまとめられた事。

伝説は事実だけでなく、恐怖や夢、特に人々の幻想についても語っている。異なる時代の同じ道、又はたぶん我々と同じ家に住んでいた人々の。その四十二の不思議な物語の一つ一つが豊かな想像の結晶によって作られており、その生き方や生活や思想が滲み出している。それらは確実に今日の、かつて同様に不可思議なジロナを作り出すことに役立っている。

最後に私が述べたいのは、この企画の創始者達とその著者への祝辞と、彼らの偉大なる成功を心から祈っていることだ。

Jordi Martinoy i Camós（ジョルディ・マルティノイ・カモス）
カタロニア行政政府　ジロナ県代表

伝説は歴史と
密接な関係

伝説は歴史ではない、しかしそれらは歴史と密接な関係にある。全ての伝説は歴史的背景を持ち、口から耳へと語り継がれ、時間の経過が独自の個性を形成し、実際に起きた現実の出来事に幻想的な、神秘的でさえある性質を与える。

歴史が学識者達の所有物であるなら、伝説は元来庶民的でより幅広い需要を持つ。伝説がもつこの様な側面は、歴史的事実の主題を抜粋し、創作的に変化していく為だろう。

ジロナは素晴らしい歴史に満ちた都市であり、又伝説においても豊かな富を持っている。

だから我々の地元とその地方の伝説集をホテルの設備に施すとは、実に見事な選択だ。その設立にあたってホテルにつけられた「Llegendes de Girona」（ジロナの伝説）の名前と同様に。

Enric Mirambell i Belloc（エンリック・ミラムベリュ・ベリョック）
ジロナ市公式　年代史記録家

偉大な歴史の重みと
独創性のある建物の一つ

ジロナの心地よい一角に、偉大な歴史の重みと独創性をもつ建物の一つが復元されつつある。それはジロナ旧市街全域の古い建物の中でも、最も原型を保ち最小限に修正されたものの一つ、そしてそこは質の高い変化に揺れ動き、沸きたっている地区だ。

ホテルはその高貴な建物にふさわしい用途である。市を囲む壁の気高さと歴史の重みもその建物の価値を高めている。

ジロナが体験してきた歴史的中心部の全ての変遷を考慮した上で、それは明快で分かりやすい未来への賭けだ。

街の心臓部となる心温かく迎えいれる建物は、ちょうど街の玄関口、ほぼオンニャー川に沿い聖フェリウ教会の足元にある。

Joaquim Nadal i Ferreras（ジョアキム・ナダル・フェレラス）
カタロニア政府　領土・公共事業省　官僚

ジロナに根づいた
文化と歴史遺産

人類の歴史は周囲との関わりの中で、個々の記録をつなぎ合わせて築かれた。その中心にあるものを我々は'文化'と呼ぶ。今日における文化も全て遺産や伝統として考えてもいいだろう。それらは個々が長い時間をかけ意図的に創造し、蓄積し、伝承してきた。

この様に文化における異なる構想を認識すると、ジロナの歴史は英雄的行為や偉大なる戦いの様な'不滅のジロナ'として寄せ集められた歴史の記憶だけではなく、その伝説や神話を通して構築された、特にそれらに起源する歴史も含めて伝えるべきだ。神話は街の歴史遺産の中に隠れており、それゆえジロナに根づいた文化を形成している。

ジロナはカタルニアの玄関口にあり、常に異なる文化が出会う場所で、街の通りにそれらの遺産を残してきた。庶民の文化の一部を形成している伝説を基盤として構築されたこの街は、見事な芸術遺産と考古学の気品を持って設計された―控えめに言って、ヨーロッパの他の大都市に引けをとならい。ホテル「Llegendes de Girona」はこの遺産の再活用の美しい例で、ジロナ市民へ地元の歴史を広める手助けとなっているだけでなく、これから更に我々の歴史と、今我々が共に形成しているより身近な文化をも編集・保存していく可能性がある。そして他の地域から来る人々は我々の過去をより理解出来るだろう。ホテルは古代北からの街への入口、ちょうどいくつかの道が交わる場所に位置している、そこを使わない手はない。ジロナの最も古く美しく魅力的な場所が、訪問者達へ心地良く嬉しい到着をもたらすだろう。

これら全ての理由から、ジロナはその魅力的な遺産全てが、それぞれ幻想を蓄積した伝説を内包しており、その魅力が訪問者たちを惹きつける。千年前のモニュメントや薄暗い細い路地の背後にあるこれらの伝説を味わえる事に、彼らは少なからず感謝するだろう。現在文化的観光は益々一般的になり、旅行者たちは観光ガイドを同伴し、マスメディアを通して知ったモニュメントや美術館等を訪ねる、その様にして個々に知識を習得する。しかし街にとって本当に賞賛に値する最も不可欠な文化は、庶民伝来の神話と伝説である。これらの歴史から人々が共有する空想が湧き出す時、架空の物語が歴史的事実の中に融合する。

最後にジャウメ・マルケス（Jaume Marqués）の著書「旧ジロナ」（Girona vella）からの一節を引用したい、それはジロナの市民社会における古代遺産の重要性について適確に述べているので。「この旧ジロナのために共有する愛はその住民全体をより団結させ、その集団生活をより穏やかで喜ばしいものにするだろう。」

Eduard Nadal i Martín（エドゥアルド・ナダル・マーティン）
バルセロナ自治大学（la UAB）歴史学部　学生

我々の地方は成長している

ジロナ市を訪れる人達、又はジロナ県内のどの場所でも散策する人々は、我々の特質を形成している要素やその状態に惹きつけられる。それは自然風景に始まり、地元料理の味へと続き、余暇の時間の過ごし方や我々の文化遺産まで。ジロナの伝説はこれら遺産の一部であり、伝統や有名な歴史年代記の中で構築された。

ジロナ県庁一同より、我々はこの様な志の高い、今回ホテル「Llegendes de Girona」と共に'Fundació 60'によって着手されたその企画に大変感謝している。我々の地方は育ち、より豊かなものを提供し、その基盤の価値を高めている中で、この様な先導は誠に有難いことだ。

Carles Pàramo i Ponsetí（カルラス・パラモ・ポンセティ）
ジロナ県庁（Diputació de Girona）代表

伝説は市民の気持ちの投影

我々の過去はしばしば正気のない退屈な舞台空間の中で石のモニュメントとして現れる。それに対し伝説は、有難いことに非凡な象徴的意味を持ち、ジロナの歴史上実在の人物達の不安、怒り、幻想、そして夢を濃縮している。このようにして伝説はその白黒画像の歴史に対抗する効果的な解毒剤となって、歴史の次元での生活へ我々を引き込む。

この様な理由から、伝説はそれぞれ市民の気持ちを投影していると言えるだろう。過去を見返す事は、我々がそれを主体としてとどまる為ではなく、まさに逆で、我々が何者であるか明確な見解を持って現在を見つめる為、そして未来に向かって進む為、我々がどの様に成りたいか開眼する為に役立つものだ。

今日のジロナは豊かな歴史を持ち、しかしそれらジロナの伝説の時代からは随分異なっている。だからこの不動の過去をただ反映しようとするのは間違いだ。今日私達の街が直面している挑戦とは、未来を見つめ新たな日の出へ向かって前進する為に、我々の歴史の富を吸収すること。このやり方でのみ、将来のジロナ市民が過去に誇りを感じ続けることが達成出来るだろう。

Carles Puigdemont i Casamajó（カルラス・プッジデモント・カサマジョ）
ジロナ市役所　市議会議員　CiU党代表

第一級の観光サービス

私は送られてきたホテル「Llegendes de Girona」の本を、端から端まで注意深く読みました。その全ての内容と今だかつてない新しいやり方で第一級の観光サービスを広めている、この企画事業を私は心から祝福したい。

本当におめでとう、そして更なる躍進を祈る。

Ramon Ramos i Argimon（ラモン・ラモス・アルジモン）
ジロナーコスタブラバ観光庁　代表

文化、遺産、“魅惑的”で不思議：平穏な安息と新しい体験を求める旅行者のための場所

お見事！今我々の住む街における観光業の将来性は高まっており、我々の地を訪問する旅行者へその文化遺産を案内する時が来たと理解している。観光は文化の類義語であり、だからもし我々がその二つを上手く運びたければ、我々の資産を提示すべき―その豊かな歴史と印象深い文化遺産を…！

それら基本的要素を質の高いサービスに加えれば、ありがちな団体観光旅行から充分距離をおいた観光を、長い時間をかけてそのいくつかの親切な基盤を築く事が出来るだろう。この様にして経済の流動性に頼る事も、旅行業社につけこまれる心配もなくなるはずだ。

あらゆる設備が整った小さなホテルは、平穏な安らぎと新しい体験を探し求める旅行者への保証として、ジロナ市の観光が備えるべき質である。これらの大変基本的な要素は、現代において見つける事が難しい、少なくとも観光業界が生み出した団体観光旅行においては。

いくつかの良質なサービスの一つで否定出来ないのは‘魅惑的’である事の必要性だ。それは顧客サービスにおいて常になくてはならないもの、その上で旅行者達が伝説的不可思議な空気を体感すれば、その美しい大理石に刻まれたジロナの伝説をより深く理解出来るだろう。成功する事は疑いない。

最後に私は、彫刻家ジェラード・ロカ・アイェーツを、彼が作り出したその素晴らしい大理石彫刻の為に、そして報道記者で人類学者であるヌリ・ロス・ルエを、伝説の編集にあたって、そして‘Fundació60’を、この真に志の高い文化事業企画の為に祝福したい。

Emili Rams i Riera（エミリ・ラムス・リエラ）
アングレス市　歴史公文書保管者

我々のジロナ地方の歴史をより深く知る

四十二のジロナの伝説をまとめた本を送って頂き、とても感謝している。

それと同時に、この誠に革新的で興味深い文化事業の先導を心から祝福したい。

この本の出版は、非常に的を得ていると思う。一方でジロナを訪れるホテルの利用客へ、手を伸ばせる範囲のいくつかの伝説とレリーフを提供し、ジロナ地方の歴史をより深く知る機会を与える。そして更にジロナのこの新しいホテルの独自性と、そこにしっかりと根づき街の一部を形成しようという意志を表している。

幸運を祈る。

Xavier Soy i Soler（チャヴィエ・ソイ・ソラール）
ジロナ県庁（Diputació）副代表

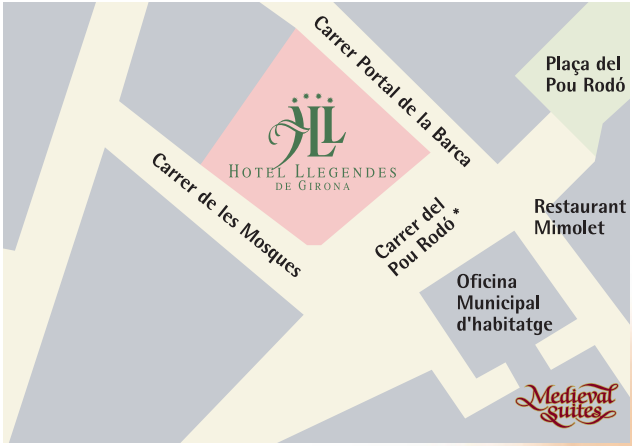
C/ Portal de la Barca, 4 - GIRONA
www.fundacio60.org

C/ Mosques, 1 - Calle Pou Rodó, 5 GIRONA

旧市街　(Barri vell)
聖フェリウ教会のそば　ジロナ

Fundació60役員
Mallartファミリー、ジロナ司教
Monsenyor Carles Solerとの祝賀会にて
写真左から右へ:
Oriol Mallart (広報)
Anna Mallart (広報)
Roser Vallmajó (2007年2月28日死去)
Mons. Carles Soler（ジロナ司教）
Carles Mallart (Fundació副代表)
Marc Mallart (Fundació代表)
赤ちゃんEstel とAstrid

Fundació60管理運営部
www.fundacio60.org



*1964年まで聖ナルシス通り（Carrer de Sant Narcís）
ジロナ旧市街

ジロナ県内にあるF60

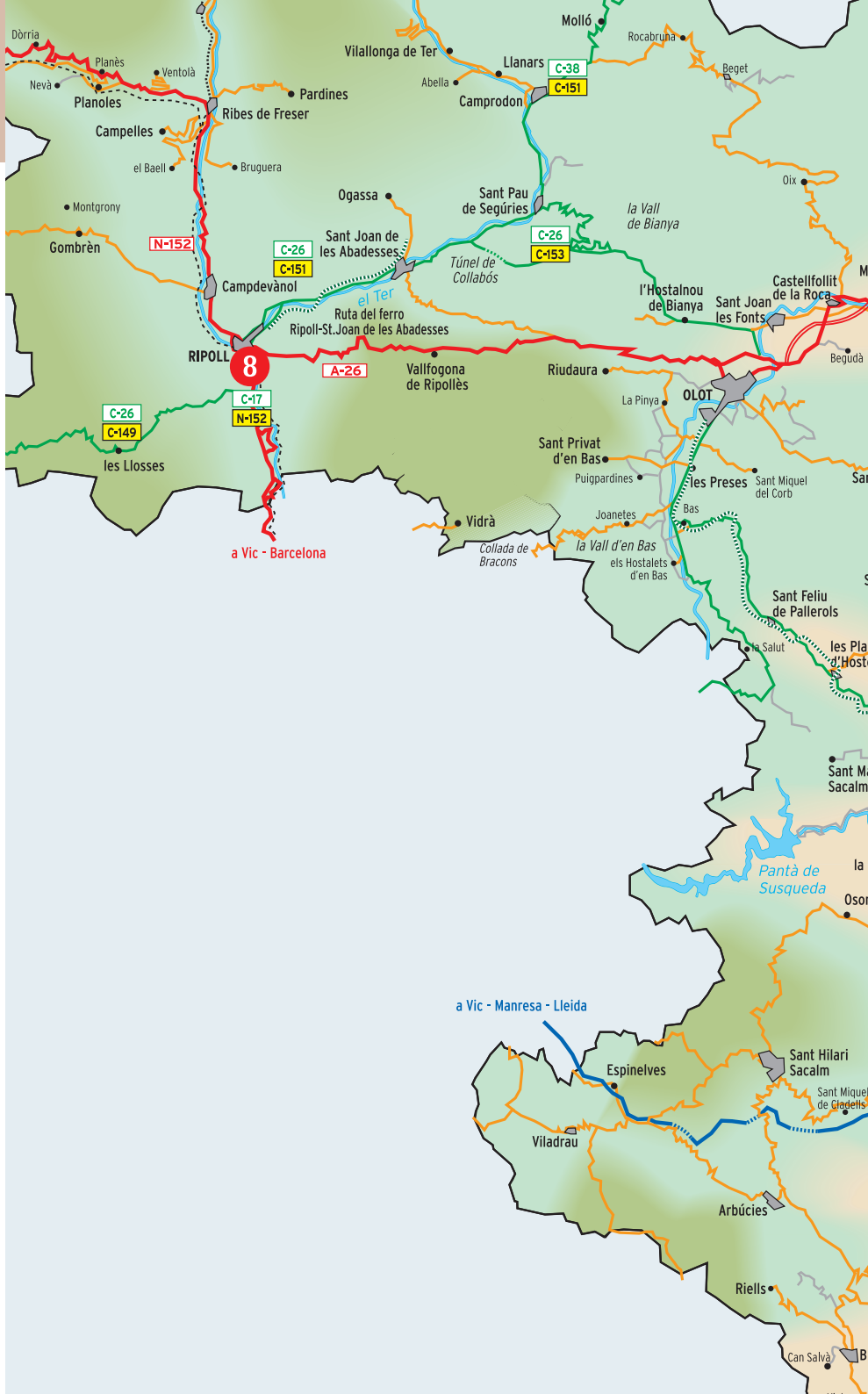
ジロナ市

- 2 ジロナの創設者ジェリオ
- 4 聖ナルシスの召使
- 5 聖ナルシスの足跡
- 6 カタコンベ
- 7 カルレマニィ
- 9 寺の下の竜
- 11 カルカッソンのエルメセンダ
- 12 エストパの頭のファルコン
- 13 雌ライオンのお尻
- 14 オオカミ通り
- 15 ガリガンスのセイレーン
- 17 ジロナのユダヤ人
- 18 聖ナルシスの蝿
- 20 リンゴ
- 21 聖フェリウと教会学校の泥棒
- 22 タルラ
- 23 大聖堂の魔女
- 25 ランブラの吸血鬼
- 27 聖アントニィの豚
- 28 聖フェリウの生涯と奇跡
- 29 鐘'ベネタ'
- 30 聖ナルシスとフランスの毒殺魔
- 31 ペリコットの泉
- 32 奇跡の綿
- 33 ランプの油
- 36 灯火について
- 37 奇跡の石
- 39 聖カタリナの象徴主義
- 41 メルカダルのパン職人
- 42 ココリョナ

TORRE GIRONELLA
FERRADURA
PG. GENERAL PERALTA
PG. GENERAL PERALTA
JARDINS D'E. COLOMER
MURALLA
JARDINS DE JOAN GUSTER
SANT DOMÈNEC
FACULTAT DE LLETRES I ESCOLA UNIV. DE TURISME
UNIVERSITAT DE GIRONA
RECTORAT
UdG - CAMPUS BARRI VELL
PL. JOSEP FERRATER
JARDINS DELS ALEMANYS
PERE ROCABERTI
ALEMANYS
PL. SANT DOMÈNEC
PJ. SANT DOMÈNEC
PORTAL NOU
PG. FORA MURALLA
CAPUTXINS
PERE III EL CERIMONIÓS
SANT JOSEP
TORRE DELS SOCORS
CANIGÓ
ES ONOFRE POU
TR. PORTAL NOU
MUSEU BÍBLIC
PJ. ST. MARTÍ
LLEBRE
PORTAL NOU
PL. LLEDONERS
BELL-MIRALL
PJ. CATEDRAL
CENTRE D'ACOLLIMENT
JARDINS MARISTES ESCOLA PIA
BARRI VELL
DIPUTACIÓ DE GIRONA
ARXIU HISTÒRIC
MORA
SANT JOSEP
CLAVERIA
LL. BATLLE
CALL JUEU
CENTRE BONASTRUC DE PORTA
OLIVA I PRAT
CULTURA GENERALITAT
PL. SANT JOSEP
J. PLA I CARGOL
AJUNTAMENT DE GIRONA
PL. DEL PALLOL
UNED
CENTRE CULTURAL LA MERCÈ
JARDINS DE LA MURALLA
CUNDARO
ESCALES DE LA PERA
17
FORÇA
PL. CORREU VELL
B. CARRERAS P.
FONTANA D'OR
ALBERG DE JOVENTUT
INFORMACIÓ CIUTADANA
TEATRE MUNICIPAL
PJ. MERCÈ AURIGA
PASSEIG DE LA MURALLA
MUSEU D'HISTÒRIA
BALLESTERIES
QUATRE CANTONS
G. FOURNÀS
CORT-REIAL
PL. OLI
VOLTES D'EN ROSÉS
PL. CASTANYES
MINIALI
PL. MERCADERS
CIUTADANS
FERRERIES V.
NOU DEL TEATRE
PL. BELL-LLOC
TR. AURIGA
BEATES
PL. JACINT VERDAGUER
22
ARGENTERIA
PL. RAIMS
BESADÓ
PEIXATERIES VELLES
MERCADERS
PL. DEL VI
BISBAT
25
PONT DE SANT AGUSTÍ
OLLES
ABEURADORS
GERMANS BUSQUETS
PJ. PONT DE PEDRA
CROADA
ALBEREDA
ESGLÉSIA DEL SAGRAT COR
VERN
BANYOLES
TROIA
PL. GRAL MARVÀ
PONT D'EN GOMEZ
PONT DE LES PEIXATERIES VELLES
RB. LLIBERTAT
42
SALES MUNICIPALS D'EXPOSICIONS INFORMACIÓ TURÍSTICA
PL. INDEPENDÈNCIA
SALA D'ASSAIG LA PLANETA
SANTA CLARA
PONT DE PEDRA
PL. CATALUNYA
C.A.P. SANTA CLARA
CORREUS
REAL DE FONT CLARÀ
NORD
MERCADAL
ORFA
SANTA CLARA
CLÍNICA L'ESPERANÇA
PL. POMPEU FABRA
JUTJATS
HORTES
PERILL
27
MUSEU DEL CINEMA
UdG EL MERCADAL
ANSELM CLAVÉ
PL. SANTA SUSANNA
PREMIÀ
41
PL. JOSEP PLA
GINESTA
FONTANILLES
AV. RAMON FOLCH
DELEGACIÓ TERRITORIAL DEL GOVERN
PL. JORDI DE SANT JORDI
EIXIMENIS
SEQUIÀ
PT. EMILI BLANCH
FONTANILLES
39
CASA DE CULTURA
CEIP EIXIMENIS

ジロナ県

1 バニョレス湖
3 アフラの改宗
8 毛深いギフレ
10 聖マウリシと カルダスの邪悪な老婆
16 城の息子
19 カステリョの牛の呻き声
24 悪魔の橋
26 黄金の雄牛
34 シルス湖
35 リェルスの魔女達
38 リェルスの魔女達
40 恋人達の泉



COSTA BRAVA
Pantà de Boadella
Biure
Sant Llorenç de la Muga
Albanyà
Boadella d'Empordà
Pont de Molins
Terrades
Cabanes
Llers
Peralada
Pedret i Marzà
Vilajuïga
Pau
Sant Pere de Rodes
el Port de la Selva
la Selva de Mar
Platja del Pas
El Golfet
Platja d'Arqueria
PARC NATURAL DEL CAP DE CREUS
Portlligat
Cadaqués
Badia de Cadaqués
Cap de Creus
Cala Jóncols
Palau-saverdera
Vilabertran
Vila-sacra
Castelló d'Empúries
Roses
Montjoi
Platja de Roses
Platja de la Punta
Platja de Canyelles
Platja de l'Almadrava
Empuriabrava
Platja d'Empuriabrava
Sadernes
Mare de Déu del Mont
Cistella
FIGUERES
Vilanant
Vilafant
Lladó
Avinyonet de Puigventós
Santa Llogaia d'Alguema
el Far d'Empordà
Fortià
la Muga
P. N. DELS AIGUAMOLLS DE L'EMPORDÀ
Riumors
Vilamalla
Sales de Llierca
Tortellà
Beuda
Maià de Montcal
Cabanelles
Borrassà
Navata
Ordis
Argelaguer
Sant Jaume de Llierca
Besalú
Crespià
Espinavessa
Pontós
Garrigàs
Siurana
Vilamacolum
Sant Pere Pescador
Golf de Roses
PARC NATURAL DE LA ZONA VOLCÀNICA DE LA GARROTXA
Sant Ferriol
Esponellà
el Fluvià
Serinyà
Romanyà d'Empordà
Palau de Santa Eulàlia
Sant Tomàs de Fluvià
Torroella de Fluvià
Sant Miquel de Fluvià
l'Armentera
Sant Martí Vell
el Torn
Sant Miquel de Campmajor
Fontcoberta
Bàscara
Galliners
Vilademuls
Vilaür
Orriols
Sant Mori
Ventallo
Sant Martí d'Empúries
Platja del Moll Grec
Platja de les Muscleres
Platja de l'Escala
Platja de Riells
Porqueres
Mieres
Estany de Banyoles
BANYOLES
Vilavenut
Pujals dels Pagesos
Vilamarí
Sant Esteve de Guialbes
Pujals dels Cavallers
Olives
Camós
Pujarnol
Falgons
Sant Aniol de Finestres
Cornellà del Terri
Palol de Revardit
Camallera
Saus
Viladamat
l'Escala
Riells
Cala Montgó
Garrigoles
Albons
Viladasens
Vilopriu
Colomers
la Tallada d'Empordà
Sant Jordi Desvalls
Cervià de Ter
Jafre
Bellcaire d'Empordà
Sobrestany
Cala Farriola
Golf de la Monedera
Cala Pedrosa
Granollers de Rocacorba
Medinyà
Sant Joan de Mollet
Flaçà
el Ter
Verges
Ullà
l'Estartit
Sant Esteve de Llémena
Sant Martí de Llémena
Ruta del carrilet Olot-Girona
Canet d'Adri
Bordils
Foixà
Ultramort
Torroella de Montgrí
Àrea Protegida de les Illes Medes
Platja Gran
Amer
Celrà
Sant Martí Vell
la Pera
Rupià
Fonolleres
Gualta
Serra de Daró
Sarrià de Ter
Sant Julià de Ramis
Juià
Púbol
Parlavà
Llabià
Fontanilles
Platja de Pals
Sta. Afra
Sant Gregori
Salt
Madremanya
Ullastret
Palau-sator
Sant Julià de Boada
Corçà
Monells
LA BISBAL D'EMPORDÀ
Peratallada
Canapost
Platja de sa Riera
sa Riera
sa Tuna
Platja de sa Tuna
Cellera de Ter
Bonmatí
Bescanó
GIRONA
Sant Sadurní de l'Heura
Cruïlles
Vulpellac
Sant Feliu de Boada
Pals
Begur
Cap de Begur
Vilablareix
Anglès
Aiguaviva
Quart
Fonteta
Torrent
Regencós
Fornells
Aiguablava
Platja d'Aiguablava
Llofriu
Esclanyà
Aigua Xelida
Platja de Tamariu
Tamariu
Sant Dalmai
Salitja
Aeroport Girona-Costa Brava
Fornells de la Selva
l'Onyar
Llambilles
LES GAVARRES
Palafrugell
Mont-ras
GIV-6546
Cala Pedrosa
Cala de Gens
Brunyola
Castanyet
Vilobí d'Onyar
Fiudellots de la Selva
Campllong
Cassà de la Selva
Ermedàs
Llafranc
Platja de Llafranc
Platja del Canadell
Platja de Port Bo
Calella de Palafrugell
Vall-llobrega
Sant Andreu Salou
Franciac
Romanyà de la Selva
Calonge
Platja de la Fosca
la Fosca
Cala Margarida
Palamós
Platja Gran
Platja d'es Monestrí
Platja de Sant Antoni
Platja de Torre Valentina
Cala Cristus-ses Torretes
Platja d'Aro
Cala sa Cova
Cala Rovira
Platja d'Aro
Cala sa Conca
s'Agaró
Platja de Sant Pol
Sant Pol
Platja de Sant Feliu de Guíxols
Sant Feliu de Guíxols
Canyet
Platja del Senyor Ramon
Platja de Canyeretes
Cala Salionç
Salionç
Cala Giverola
Sant Grau
SANTA COLOMA DE FARNERS
Carril bici Girona-St. Feliu de Guíxols
Llagostera
Sant Antoni de Calonge
Caldes de Malavella
Riudarenes
Sils
Vidreres
Maçanet de la Selva
Solius
Castell d'Aro
Santa Cristina d'Aro
Sant Feliu de Buixalleu
Massanes
Hostalric
A-26
A2
C-66
C-150
C-252
C-260
C-31
C-252
C-255
C-63
C-152
C-25
C-63
C-253
C-35
C-253
C-65
C-250
C-31
C-257
C-253
E-15
AP-7
N-141
1
3
10
16
19
24
26
34
35
38
40

参考文献

Alberch, Ramon: El miracle de les mosques i d'altres llegendes. CCG Edicions, 2001.
Amades, Joan: Costumari català. El curs de l'any. Vol. V. Salvat Editores i Edicions 62, 1982.
Amades, Joan: Costumari català. El curs de l'any. Vol. IV. Salvat Editores i Edicions 62, 1989.
Calzada i Oliveras, Josep: Les campanes de Girona. Diputació Provincial de Girona, 1977.
Clara, Josep i Marquès, Josep: Sant Feliu de Girona. Edita Centre d'Estudis Diocesà.
Costa, Lluís i Maroto, Julià: Història de Girona. CCG edicions, 1991-2000.
De Riquer, Martí: Llegendes històriques catalanes. Quaderns Crema, 2000.
Fàbrega, Albert: Llegendes de ponts, dòlmens i menhirs a Catalunya. Itineraris. El Farrell edicions, 2000.
Gibert, Josep, 1946. Girona. Petita Història de la ciutat i de les seves tradicions i folklore. (Imprès el 29 d'octubre de 1946, diada de Sant Narcís)
Marquès i Casanovas: Girona vella. Vol I i II. Edita Ajuntament Girona, 1979.
Pla Cargol, Joaquim: Santos mártires de Gerona. Dalmáu Carles, Pla, SA Editors, 1962.
Van Gennep, Arnold: La formación de las leyendas. Editorial Altafulla, 1982.
Vila, Pep: El Tarlà de Girona i les festes del carrer de l'Argenteria. Ajuntament de Girona, 2004.
Violant i Ribera, Ramona: El món màgic de les fades. Farrell editors, 2002.
Vivó, Carles: Llegendes i misteris de Girona. Quaderns de la Revista de Girona, 1989.

初版印刷: 2007年4月

編集・発行: FUNDACIO60
www.fundacio60.org

大理石彫刻: Gerard Roca i Ayats
e-mail: gerard.roca.ayats@hotmail.com

伝説著者: Nuri Ros i Rue
e-mail: rrnurry@hotmail.com

デザイン・レイアウト: Estudi Sicília
e-mail: sicilia@intercomgi.com

写真: Pere Sicília
PTCBG, Antonio Garrido, Francesc Tur, Kim Castells, J.L. Banús, Pep Iglesias, Joan Ureña, Ariadna Àlvarez, Jordi Mas, Josep Padilla, Toni Soriano, Fundació Gala/Salvador Dalí

和訳: Yoko Kataoka
e-mail: yoko.kataoka@gmail.com

地図: © Ajuntament de Girona UMAT
Patronat de Turisme Costa Brava Girona

印刷: Gràfiques Alzamora - Girona

リーガル番号: Gl.549-2007

FUNDACIÓ60

www.fundacio60.org

VERSION: CATALAN, SPANISH, ENGLISH, FRENCH, GERMAN, RUSSIAN, ITALIAN, JAPANESE
WORKING ON IT: DUTCH, ARAB, CHINESE

ESTOVIDIA